

# 卵塔場の天女

泉鏡花

青空文庫



時雨に真まっさお青あおなのは蒼かわはぎ鬣ひれ魚の鰭である。形は小さいが、三十枚ばかりずつ幾山にも並べた、あの暗灰色の菱ひしがた形うおの魚を、三角形に積んで、下したづみ積みになつたのは、軒下の石に藍あゐを流して、上の方は、浜の砂をざらざらとそのままだから、海の底のピラミッドを影で覗のぞく鮮あたらしさがある。この深秘らしい謎うおの魚を、事ともしない、魚屋は偉い。

「そら、持ってけ、持ってけ。賭博場ほんごぎのまじないだ。みを食えば暖ほか暖ほかだ。」

と雨垂あまだれに笠も被かぶらないで、一山ずつ十銭の附木札にして、喚わめいている。

やっぱり綺麗なのは小鯛こだいである。数は少いが、これも一山ずつにして、どの店にも夥おびただ多たしい。二十銭というのを、はじめは一尾びきの値だろうと思うと、十とウあるいは十五だから、なりは小形でもお話になる。同じ勢いきおいをつけても、鯛の方はどうやら蒼蠶魚より売手が上品に見えるのも可笑おかしい。どの店のも声を揃えて、

「活いきとるぞ、活いきとるぞウ。」

この魚市場に近い、本願寺別院―末寺と称となえる大道場へ、山から、里から、泊りがけに参詣さんけいする爺婆じじばばが、また土産にも買って帰るらしい。

「鯛だぞ、鯛だぞ、活きとるぞ、魚は塩とは限らんわい。醤油  
 で、ほつかりと煮て喰わっせえ、頬ぺたが落ちちる。——一ウ一  
 ウ、ニアニアそら二十よ。」  
 何と生魚を、いきなり古新聞に引包んだのを、爺様は汚れ  
 た風呂敷に捲いて、莫蔭の上へ、首に掛けて、てくりてくりと行  
 く。

甘鯛、いとより鯛、魴の濡れて艶々したのに、青い魚が  
 入交つて、鱧も飴色が黄に目立つ。  
 大釜に湯気を濛々と、狭い巷に漲らせて、逞しい漢が向  
 願巻で踏はだかり、青竹の割箸の逞しいやつを使って、押  
 立ちながら、二尺に余る大蟹の真赤に茹る処をほかほかと引上

げ引上げ、畳一畳ほどの筵むしろの台へ、見る間に堆うずたかく積む光景は、油地獄で、むかしキリシタンをゆでころばしたようには見えないで、黒奴くろんぼが珊瑚烟さんごぼたけに花を培う趣がある。——ここは雪国だ、あれへ、ちらちらと雪が掛かかつたら、真珠が降るように見えるだろう。

「七分じやー八分じやー一貫じやー、そら、お篝かがりじや、お祭じや、家も蔵も、持ってけ、背負しよつてけ。」

などと喚わめく。赫かくやく耀たる大蟹を篝かがりび火は分つたが、七分八分は値段ではない、肉みの多少で、一貫はすなわち十いっぱい分の意味だそうである。

菅笠すげがさ脚絆きやはんで、笹ざさに積んで、女の売るのは、小形のしおらしい蟹いちで、市の居いちつきが荷を張つたのではない。……浜から取立て

を茹<sup>ゆ</sup>上げて持出すのだそうで、女護<sup>にょご</sup>島の針刺<sup>はりさし</sup>といった形。

「こうばく蟹いらなかねえ、こうばく蟹買つとくなあ。」

こう言うのを、爪は白し紅白か。聞けば、その脚の細さ、みどころと云つてはいくらもない、腹に真紫の粒々の子が満ちて、甲を剥<sup>は</sup>がすと、朱色の瑪瑙<sup>めのう</sup>のごとき子がある。それが美味なのだという。(子をば食う蟹)か、と考えた。……女が売るだけにこれは不<sup>ぶ</sup>躰<sup>しつけ</sup>だった。香箱蟹だそうである。ことりと甲で蓋<sup>ふた</sup>をしていかにも似ている。名の優しい香箱を売る姉さんだが、悪く値切ろうものなら泡のごとく毒を噴く。

びしやびしや、莫<sup>も</sup>塵<sup>ごじ</sup>を着て並んで、砂つきの小鰯<sup>こいわし</sup>のぴかりと光るのを売る姉<sup>あね</sup>えも同じで、

「おほほだ、そんな値なら私が食う。」

と、横よこぐわ脚くわえにペロリと舐なめる。

「活きものだ。活きものだ。」

どこも魚市は気が強い。——私は見ていたが——妙なもので、  
ここで鯨を売ればといつても、山車だしに載せて袴かみしもで曳ひきもしまいし、  
あの、おいらんと渾名あだなのある海豚いるかを売ればといつて、身を切つて  
客に抱かせもしないであろうが、飯い蛸だこなぞもそうである……栄さ  
螺ざえ、黄螺ばい、生の馬刀貝まてがいなどというのと、張出した軒並ひっこを引込んで、  
異おつに薄暗い軒下の穴から、こう覗のぞく。客も覗く。……

つま屋と名づくるのが、また不思議に貝蛸の小店に並んでいて、  
防風芹ぼうふうふ、生海苔なまのり、松露、菊の花弁はなびら。……この雨に樺かば色いろの合羽かつ



ばしめじ  
 占地茸、一本占地茸。雨は次第に、大分寒い、山から小僧の千本

占地茸、によきりと大松茸は面白い。

私が傘を軒とすれすれに翳してゐんだ処は——こう言出すと、

この真剣な話に、背後へ松茸を背負っているようで、巫山戯たら

しく見えるから、念のために申して置くが、売もののそれ等は、

市の中を——右へ左へ、肩擦れ、足の踏交る、狭い中を縫って

歩行いた間に見たので、ちようど立ったのは、乾物屋の軒下で、

四辻をちよつと入った処だった。辻には——ふかし芋も売るから、

その湯気と、烏賊を丸焼に醤油の芬々とした香を立てるのと、

一二条の煙が濃淡あい纏れて雨に靡く中を抜けて来た。

「御免なさいよ。——連が買ものをしてるのを待ってるんですか

ら。」

私と袖そでを合わせて立つた、橘八郎たちばなが、ついその番傘の下になる

……しじみ むきみ 蜆の剥身の茹ゆつたのを筧ゆだに盛つくって踞くばっている親仁おやしに言った。

——しずく どうも狭いので、傘の雫しずくがほたほたと剥身に落ちて、親仁がにが 苦い顔をして睨にらみ上げたからである。

八郎はこの土地生まれで、十四五年久振りで、勤めのために帰郷する——私の方は京都へ行く用があつた。そこで自然誘われて、雪国の都を見物のため、東京から信越線を掛けて大廻りをしたのであつた。

当国へは昨夜ついた。

八郎の勤めというのも、その身の上も、私が説明をするより宿

帳を見れば簡単に直ぐ分る。旅店で……どちらをはじめてだが、とにかく嚮導きょうどうだから……女中が宿帳を持参すると、八郎はその職業という処へ——「能職のうしよく。」と認めしたためた。渠かれは能役者である。

戸籍の届出とどけいでは、音曲教師だというから、その通りなり、何とか記しようがありそうな処を、ぶつきらぼうに、「能職。」——これに対して、私も一工夫したいようにも思ったが、年の割に頭も禿はげているし、露出むきだしに——学校教授、槇村まきむらと名刺で済ました。

霜月、もみじの好季節に、年一回の催能、当流第一人のお役者が本舞台からの乗込みである。ここにいささかなりとも、その出

迎への模様、対手方と挨拶の一順はあるべきだけれど、実は記すべき事がない。——仔細は別にあるとして、私の連立った橘八郎は、能楽家、音曲教師、役者などというよりも、実に「能職」の方が相応しい。

紋着、羽織、儀式一通りは旅店のトランクに心得たろうが、先生、細い藍弁慶の着ものに、紺の無地博多を腰さがり、まさか三尺ではないが、縞唐棧の羽織を着て、色の浅黒い空脛を端折つて——途中から降られたのだから仕方がない——好みではないが、薩摩下駄をびしゃびしゃと引摺つて、番傘の雫を、剥身屋の親仁にあやまつた処は、まったく、「家。」や、「師。」ではない、「職。」であろう。

東京では細君と二人ぐらしで——（私は謠や能で知己ちかづきなのではない。）どうやらごく小人数の活計くらしには困らないから、旅行をするのに一着外套がいとうを心得ていない事はない。

あの、ぼつと霧雨に包まれた山を背後うしろに、向つて、この辻へ入る時だ。……

「魚市へ入るのに、外套で、ぞろりは変だ。」

と往来で釦ぼたんをはずすと——（いま買ものをするのを待つと云つた）——この男の従姉いとこだという、雪国の雪で育つた、色の抜けるほど白い、すつきりとした世話女房、町で老舗しにせの紅屋べにやの内儀……お悦ごしんぞという御新姐が、

「段々降つて来るのに——勝手になさい。」

留めるのかと思うと、脱がして、ぎつと折つて、黒地の縞しまお召の袖ひっかに引掛けて取つた。

「先生——」

ついでだから言うが、学校の教師だから、私を先生と——云う、私も時々、先生と云う。同じ事で……その紅屋のを、八郎が、

「姉さん」と云うと、「兄さん。」と云う。「お悦さん。」と云うと「八さん。」と云う。従つて、年も同じだと聞く。

「先生は土地のお客人だ。着ていらつしやい。同じに脱ぐなんてじょうだん串戯じょうだんです、いや串戯じゃない。」

どうも、剥身屋の荷をかばうと、その唐棧の袖が雨垂あまだれに濡れる。私は外套で入交いれかわつて、傘からかさをたたんだ。

時に、辻を向うに、泥脚すねと脛すねの、びしよびしよ雨の細流せせらぎに杭くい
  
 の乱るるがごとき中へ、芻はねも上げない棲つまをきれいに、しつとりし
   
 た友染ゆうぜんを、東京下りの吾妻下駄あずまげたの素足すだに捌さばいたのが、ちらちら
   
 と交まじるを見ると、人を別けた傘を斜めに、撫なで肩がたで、櫛くし巻まきの凜りん
  
 とした細ほそ面おもての見えたのは、紅屋の内儀で。年は八郎とおなじ
   
 だが、五つ六つ若く見える処へ、女の一生に、四五度、うつくし
   
 い盛さかりがあるという、あの透通すうるような顔に、左の眉から額かみにかけ
   
 て、影かげのようだが疵きずのあとが幽かすかにある。

この婦人を、私は八さんに囁いて、密に「三傘夫人。」と称えた。別儀ではない。——今朝、旅籠屋で、朝酒を一銚子で、ちいきおいと勢のついた処へ、内儀が速に訪ねて来て、土地子の立役者はありながら、遠来の客をもてなしのそのお悦の案内で、町の最も高台だという公園へ、錦葉を觀に出掛けた。北国の習であらう、大池の橋を渡つて、真紅に色を染めた桜の葉の中に、細滝を見て通る頃から、ぽつりと雨が掛つた。すぐに晴れようと、口八台に腰を掛けた、が、その上に蔽い掛つた紅楓の大木の美しさ。色はおもて面を染めて、影が袖に透る……霽れるどころか、次第に冷い雨脚から、三人を包んで、雫も落さない。そこで小学校の生徒たちの



二列を造つて、弁当をもてあつか持あつか扱あつかいながら坂を下りに帰るのを視みたが、今日は、思掛けない雨だったものと見える。その他、遊びの人たちも、慌あわただしくはないが散り散りの中へ交まじつて……御休所と油障子に大きく書いたのを、背中へ背負しよつて、緋ひめれんすの蹴けだ出しで島田しまだまげ鬻うの娘が、すたすたと、向うの吹上げの池を廻る処を、お悦おが小走りに衝つと追つて、四阿屋あずまやがかりの茶屋の軒下に立つと、しばらくして蛇じやの目を一本。「もうけ損そくなつて不機嫌な処ところだから、少し手間が取れました。」この外交家だから、二本目は、公園の坂の出口ゆきこを行越ゆきこした町で、煙草を買つて借りたなどはものの数でもない。三本目に至つて、私たちを驚かした。それは十町ばかりも邸やしきまち町あを歩行あいて出た大川端の、寂しいしもた家だったが、

「私、私は、私は（何とか）町の、竹谷の姪めいの娘が嫁に来たうちの、縁者の甥おいに当るものの母親です。」談ずるのが、戸外おもてに待っている私たちに強く響いて、ひそかに冷汗になつていた処――

「むふん。」と笑いながら出て来て、ばりばりと油の乾いた蛇目傘を開いた。トンと轆轤ろくろを切つて、外套がいとう兩名、相合傘でいた私に寄越よこして「ちよつと骨が折れました、遠い引掛ひっかかりなんですがね……聾つんぼで中風症ちゅうふうせいのお婆さんが一人留守をしているんだもの、驚きましたわ。」「驚いた。」と八さんが言うから、私も「驚きましたなあ。」「だつてね、ようやっと談判が調つた処で、お婆さん、腰が立たないんでしょう。私が納屋へ入つて搔かきまわして持つて来たんですのさ。」「肩がきがつくぜ、まるで昼ひるとんび鳶びだ。」と八

さんが言うのと、つんと横を向いたが、たちまち白い手で袖下を掬すくつて、「ウシ、ウシ、ウシウシ。」もののたとえにさえ云う……  
 枯かれやなぎ柳の川端を、のそのそと来た野良犬を、何と、佐川田喜六の蛙以上に可恐おそろしがる、能職三十九歳の男に「ウシ、ウシ」と噓うそ掛しかけると、「不可いけない姉さん。」と云う下から、田舎の犬は正直で、ウウと吠ほえ掛かつたから、八さんは、ワツと云つて遁にげ出すと、追掛おけようとする野良を傘からかさでばツさり留めて、橋はしたもと袂えのきの榎ぶツに打なつかりそうな八さんを、「馬鹿だわねえ。……大きな態なりをして。……先生、おつきあい遊ばすのに、貴方あなた、さぞお骨が折れましよう。」その凜りんとした眉が、雨に霞むように優しかった……

いまその三傘夫人の姿が見えると、すぐ後へ引添<sup>うしろ</sup>つて、袂<sup>たもと</sup>をす  
 れすれに大鮒<sup>おおふな</sup>が一匹、脊筋<sup>ひるがえ</sup>を翻<sup>ひるがえ</sup>して、腹<sup>はら</sup>にきらきらと黄金<sup>きん</sup>の波  
 を打<sup>う</sup>つて泳ぐのが見えた。見事な鮒<sup>ふな</sup>よ、ぴちぴちと躍<sup>な</sup>つて、宙<sup>そら</sup>に  
 雨脚<sup>あまあし</sup>を刎<sup>は</sup>ねるようである。それは腰<sup>こし</sup>蓑<sup>みの</sup>で、笠<sup>かさ</sup>を被<sup>かぶ</sup>つた、草鞋<sup>わらじ</sup>穿<sup>は</sup>  
 きの大年増<sup>おとしぞう</sup>が、策<sup>さく</sup>に上げたのを提<sup>ひ</sup>げて、追<sup>お</sup>追<sup>い</sup>つた——実は、今  
 しがた……そこに一<sup>ひと</sup>群<sup>むれ</sup>、鰻<sup>うなぎ</sup>、鯰<sup>なまむぎ</sup>、鱒<sup>まづ</sup>、穴子<sup>あなこ</sup>などの店<sup>みせ</sup>のごちやご  
 ちやした中に、鮒<sup>ふな</sup>を活<sup>い</sup>かした盤台<sup>ばんたい</sup>の前<sup>まへ</sup>へ立<sup>たち</sup>停<sup>ど</sup>まつて、三傘夫人<sup>さんさんふじん</sup>が、  
 その大きいのを、と指<sup>さ</sup>さすと、ばちやんと刎<sup>は</sup>上<sup>あ</sup>るのを、大年増<sup>おとしぞう</sup>が  
 掌<sup>て</sup>に掬<sup>すく</sup>つた時は、尾<sup>おし</sup>が二の腕<sup>うで</sup>に余<sup>あ</sup>つて、私は鯉<sup>こい</sup>だとばかり思<sup>おも</sup>つた。  
 「こんなのは珍<sup>めづ</sup>らしゆうござんすぞね、奥<sup>おく</sup>さん、乳<sup>ちち</sup>の出<sup>で</sup>る事は鯉<sup>こい</sup>  
 のようなものではのうてね、これ第一<sup>だいいち</sup>や。今夜<sup>こんや</sup>から、流<sup>なが</sup>れて走<sup>は</sup>る

ぞね。」

「質屋が駆落をしまし。し。」

おおがた  
大潟とで漁る名物だ、と八郎が私に云つた。

いくら  
「幾干なの。」

「さあ、掛値かけねは言わんぞね。これで……さあ——」

この掛値がまた名物だ——と八郎は話しながら、鮎は重なつて泳いでいても、人ごみに傘からかさの雨が灌そそぐから、値の押合の間を、しばらく乾物屋の軒へ引込ひっこんだのであつた。が、よくは分らないけれども、俳人凡兆の句の——呼返す鮎売見えぬ霰あられかな——の風情がある。

が、これは時雨で……買う人の姿も水際立つて、そうして、反

対に——一旦、値がかけ違つて、内儀が足を抜いたあとを、鮎売の方が呼返して追つて来たらしい。

お悦は目ばやく私たちを見て、莞爾にっこりして、軽く手で招いた。値が出来たのである。

「お邪魔をしました。」

八郎が剥身屋むきみやの親仁しんじんに軽く会釈をしたが、その語気いかたは、故ふるさ郷人とびとに対する親みしたしぶりか、かえつて他人がましい行儀だてだか、分らないうちに、庇ひさしを離れて、辻で人ごみを出る内儀と一所になつた。手に提げた籠の笹の葉の中から金光ひらが閃めいた。

「姉さん、黄螺ばいを買つて下さい、黄螺を。」と八郎が云つた。

「何にするの？」

「まさか独楽こまにしやしない、食べるんだね。やあ久ひさしいもんだなあ。」

旅店を出がけに西洋剃刀かみそりを当てた頬を掌てで中あてた。

「東京にはこいつが少いかして、めつたにお目めに掛からないんです。いつか絵本を見るとね、灯ともを点とした栄螺さざえだの、兜かぶとを着た鯛たいだの、少し猥わいせつな蛸たこだのが居る中に、黄螺わうろの女房にようぼうといつてね、くるくと巻まいた裾すそを貝かいから長々と曳ひいて、青い衣服きもので脱出ぬけだした円鬚まるまげが乱れかかって、その癖、色白で、ふつくりとした中年増ちゅうねんぞうが描かいてあつたが、さも旨うまそうに見えたのさ。」

「可いや厭やな兄あにさん。」

「いや、お客様おきゃくさまに御馳走ごちそうするのだよ。」

「御馳走ですな。」

「ちよつと……そのだらしない年増の別嬪べっぴんを十ウばかりお出しなさい。」

売手は希有けふな顔をした。が、言戦ことばい無用なりと商売あきなに勉強で、すぐ古新聞に、ごとごとと包んで出した。……この中に、だらしない別嬪が居るのだそうである。

姿が好いいからといって、糸より鯛。——東京の（若衆）に当る、土地では（小桜）……と云うらしいが浅葱桜あさぎざくらで、萌黄もえぎに薄藍うすあいを流した鰯ぶりの若旦那。こう面白おもしろずくに嵩かさにかかると、娘の目に友ゆ染切うぜんぎれで、見るものが欲しくなる。

私も自分で値をつけて、大蟹に湯気を搦からめて提げた。



占地茸を一籠、吸口の袖まで調べて……この轆轤を窄めた状の  
 市の中を出ると、たちまち仰向けに傘を投げたように四辻が拡が  
 って、往来の人々は骨の数ほど八方へ雨とともに流れ出す。目貫  
 の町の電車の停留場がある。

——ここは八郎と連立つて、昨夜一度来て見覚えがあつた、そ  
 れは紅屋を訪ねたので。——訪ねてきて帰りには、お悦がちよう  
 どこの辻まで送つて来て、勝手働きのままだったから、玄関も廊  
 下も晴がましい旅籠まで送り返すのを猶予つて、ただ一夜——今  
 日また直ぐ逢う——それさえ名残惜そうに、元気な婦に似ず、  
 半纏の袖を、懐手で匆ねながら、姿は寂しく見送つたので  
 あつたが。——察しられる。……とところで、その昨夜の事につい

て、ここで言いたい事が少しある。

## 三

例の「能職」を宿帳に名のと直ぐだった。

「先生……」

私に対して、八郎はその親しい呼び方をして、

「もう晩の九時です。すぐに一風呂浴びて、お膳ぜんで一銚子という、旅では肝心な処ですがね、少々御無理を願いたい事があるんです。

——もうお互に年を取っているんですから、いささかたりとも御心配はありませんが、ここに私を待っていてくれる婦おんながあるんで

す。——時々——貴方あなただからお話をした事がありますね、従姉いとこな  
 んですがね。……」

隔おんなてない中だから、かねて、美人のその婦おんなのために、魂たまに火を  
 点かすかじて、幽かすかに生命を消さなかつたと云うのを聞いた。真まことの性質は  
 霜夜の幽霊のように沈んで寂しいのかも知れないのに、行ふるまい為まいは  
 極めて蓮葉はすはで、真夏のごときは「おお暑い。」と云うと我が家に  
 限よそらぬ、他家でもぐるぐる帯を解く。「暑い、暑い。」と腰紐こしひも  
 を取る。「暑いんだもの。」とすらりと脱ぐ。その皓しろさは、雪よ  
 りもひき緊しまつて、玉のようであつた。お侠きやんで、凜りんとしてゐるから、  
 いささかも猥みだりがましい処ところがない。但しその白身しろみで、八郎はちろうの古ふるい  
 家えで、薄暗い二階から、銀杏いちしようがえし返かえで、肩で、脊筋せきじんで、半身はんしんで、

白昼の町の人通りを覗のぞきながら、心ところてん 太や寒天を呼んだのはま  
だしも、その素裸で、屋根の物干へ立って、遥はるかに公園で打揚げる  
昼花火を視みながら、八が心ばかりの七夕の竹に、短冊を結んだの  
には驚いた。その頃年とし紀わずかに十七八で、しかも既に二人の子  
の母であつたのだという。

私は、早くその人を見たいと思つた。誰も、この霜月の寒さに  
裸体になるものはない——見たいというのにいささかも遠慮はあ  
るまい。

「御存じの不ぶしよ性ものだから、時々なたよりをするでもなし、先  
方も同然です。今度こちらへ来たのだから、前もつて知らせては  
ないんですから、構いはしないようなものの、血は遠くつてもた

つた一人の身寄だし……家は多人数で、他のものはどう思おうとも、従姉だけは、故郷へ帰れば、きつとその家で草鞋わらじを脱ぐものと信じていてくれるんです。

そこで、御飯前にちよつと顔を見せて来たいんです、が、このままくつろ寛いで少しの間待まっていて下されば結構だし、御一所に願えればなお結構、第一汽車で国境くにぎかいの峠を抜けた時、これからが故郷ですと云うと、先生は何と言いました。あの大瀉と海とが空に浮いて、目一杯に田畑ひらの展はてけた果に、人家十万余のあるのを視みて、（これは驚いた……かねて山また山の中と聞いたから、崖がけにごつごつと石を載のせた屋根かさが累かさなっているのかと思つたら、割合に広い。……）とどうです。割合に広いは情なさけない。私は国自慢を

した覚えはなし、自慢どころか一体嫌いなんだけれど、石屋根の家が崖にごつごつは酷ひどいや。そいつを話して従姉から先生を怨うらませたい。」

——思出しても可笑おかしい。

「望む処ですよ。」

そこで、黒い外套がいとうで、黒い中折帽なかおれぼうで二人揃つて、夜の町へ

出たとなると、忍びで乗込んだようで、私には目新しい事も多いのであるが、旅さきの見聞を記すのがこの篇の目当めあてではない。

くだらからかさ件けんの傘かさに開けた辻で——昨夕、その時電車を下りて、賑にぎやかな、

町筋あを歩行く。規模かかりは小さくつても、電燈も店みせ飾かざりも、さすが

に地方での都会であつたが、ちよつと曲角まっくらが真暗まっくらで、灯一つ置

かない夜店に、おおき たどん 大な炭団なのような梨の実と、火が少しおこり掛けたという柿を積んだ、脊の低い影のごときばあ媪さんが、ちようど通りかかった時、なまあくび 生欠伸を一つして、「おお寒、寒、寒やの。：：ありがとうございます。なまいだなまいだ。」とつぶや呟くのを聞いた。が、少なからず北国の十夜の霜と、しんらん 親鸞の故跡の近さを思わせた。

「あれが、本願寺……」

と雲の低い、おおき 大な棟を指さしながら、

「御苦労様——この小路をちよつと曲るです。」

と言うかと思つと八郎が、

「おや……」

と立留まつた、

「ここに、あの菓子屋、こつちが下駄屋と、あれが瀬戸物屋、莫ご塵ざ屋や、合羽屋かつばやと、間違まちがいッこはないんだがな、はてな、違ちがつたかな。」

と少しばかり狼狽うろたえる。……

「違ちがいはしません、——紅屋はあすこですよ。」  
と私が笑つた。

「ですがね。」

「大丈夫……間違まちがいはありません。紅屋です。」

「先生は、紅屋の鑑定家なのかなあ。まるで違ちがつてる。これは細露地を一つ取と違ちがえた……」



「ははは、大丈夫。いらつしやい。——あすこに紅屋の息子さんが坐すわっているから確たしかなものです。」

読者も思掛けなかつただらうと思う……はじめての私が、八郎の故郷のしかも親類の家を認めたのは——およそ紅屋というものを、かつて京大阪の家造やづくりで心得ていたためではない。その息子というのが、一度上京して、八郎の家に居た処へ、私がちよつと行合わせて顔を知っていたからである。

八郎は肩を揺ゆつた。

「ああ、串戯じょうだんじゃない——店たなざらしの福助の置物という処が、硝子箱がらすばこの菊慈童と早がわりをしているんだ。……これは驚いた。半葩はじとみの枢戸くるんどが総硝子になって、土間に黄菊と白菊か。……大

輪なのが獅子咲ししぎき、くるい咲と、牡丹ぼたんのように鉢植で。成程、あの

菊の中から、本家、紅屋の軒看板が見えています、串戯じゃない。

第一、この角の黒渋赤渋の合羽屋が、雑貨店にかわつて、京焼の糶せりうり売とは、何事です。さあ二貫、二貫、一貫五百は何事です

。」

とそこに人立の前では、極きまりの悪いほどの高声で、

「さあ、おいでなさい、何にしる驚いた。」

「……唯今、お迎いに出来ます処で。……どうもね、小路の入口に、妙なお上りさんがお二人ふたかた人と思ひましたよ。」

と前垂がけのその息子が莞爾にこにこ々々する。店の人たちも三人一いっ齊きに礼をしたが、十鉢ばかり、その見事な菊を並べた、ほとんど

ど菊の中にたたずイんで、ほたりと笑いながら同じく一礼した、十徳じつとくを着そうな、隠居頭の柔和な老人が見えた。これが主人である。内儀は家つきの一人娘で、その十四の時、年の三十ばかり違うのに添った、婿養子で、当時は店の御支配人だったそうである。

「変った、変った。」

と、八郎は見廻して、

「可おそろ恐しくハイカラになったなあ、ここはどこなんだろう。」

「小おじ父さん、正に御親類の紅屋です、ははは。」

「いいえさ、この菊のある処だよ、土間が広くなつてさっぱり分らないね、見当が。」

「菊のありますね、その下は台所の井戸ですよ。吃びっくり驚して、は

はは。大丈夫、危険はありません。父が手造りでしてね、屋根で育てたんですが、少々得意でしてね、その枝の撓しなった、糸咲の大輪なんぞは、大分御自慢でしてね、人様に見せたいんだが、置どころが外ほかにありませんから。」

老人はまたほたりと微笑ほほえんだ。息子に、今年の春、嫁が出来て、すっぱりと店を譲ったので、隠居仕事の気楽さに、永年の望みだったのを、今年はじめに苗から育てた、と言うのである。

「お楽たのしみですな。」

「何の……あんだ。」

「姉さんは？」

八郎は息子を見返った。

「……ええ、台所に——お、ちよつと。」

「いらつしやいまし。」

すつと、そこへ、友染模様が浮出たと見ると、店口の敷居へ、結綿島田ゆいわたが突伏つつぶした。

「やあ、これは、これはどうも、……何分どうぞ、唯ただいま今、はじめまして、おめでとう。お正月のようだ。」

と八郎は一人で照れて、

「いずれ更あらためて御挨拶を——何は、……姉さんは、お母つかさんは、

……お悦さんは？」

と、やや忙せきこ込んだように云つた。私は、はじめからその心を察し得た。留守ではないか、私もちよつときみしかつた。そうして、

店の隅なる釣棚の高い処に、出額おでこで下した睨にらみをしながら、きよとりと円い目をして、くすりと笑う……大おおな、古こい、張子の福助を見た。色は兀はげたが、活いきているようで、——（先には店頭みせさきにあつたのだと後で聞いた）——息子は好男子なのに、……八郎の言つた福助の意味も分つたが、どこに居ても、真夜中には、ふつと抜けて、屋の棟へちよんと乗つて、こここの一家を守りでもしそうで、且つ何となく、不気味だつた。

その時である。

「こつち、こつち、ほほほ。」

と派手な声が、嫁さんの花はな簪かんざしの上を飛んで来た。

すぐに分つた、店口に入る、茶の室まと正面の階子壇はしごだんの下に、

炭火の赫かつと起つた台だい十能じゆうを片手に、立っていたのがすなわち内儀で。……と見ると艶つや々つやとしたその櫛くし卷まき、古天井の薄暗さにも一点の煤すすを留とどめぬ色白さ。惜おしい事に裸身はだかではないが、不断着で着膨はれていながら、頸えり脚あしが長くすらりとしていた。

「勝手が違つたね、……それでもここが可なつか懐かしいや。」

と、八郎がすぐに長火鉢の前へ膝つを支くと、

「そこは混雑するからさ——唯今御挨拶を——」

と私には言いながら、八の脱いだ外套と帽子を、置戸棚わきの傍へ押束おつねつくぎまに、片手業かたてわざに火鉢にかかった湯気を噴く鉄瓶を提たげて、すいと二階へ上つて行く。

間ま早ばやな事は、二階にもう鉄の火鉢に、郡内の座蒲団ざぶとんが二枚直し

てあつた。

「ははあ、お火鉢の方は、先祖代々だけれど、——この蒲団は新規だな。床に和合神の掛かけもの。」

「その菊は——お手製の、ただ匆もんめと……」

と、眈めじりの切れた目をちよつと細うして莞爾にっこりしながら、敷居際で町家風まちやの行儀正しく、私が面喰めんくらったほど、慇懃いんぎんな挨拶。

「おお、障子が新しくなつて、襖ふすまが替つた、畳も入かわつて——

いや、天井の隙間すきままで紙が貼はれました。あすこから、風が吹込んで、障子の破れから霰あられが飛込む、畳のけばが、枯尾花のように吹かれるのがお定りだったがな、まるで他家よそへ行つたようだ。」

「それでもやつぱり、私の内さ、兄さん……」



と颯と寂しい影がさしたが、

「兄さんが大好きで、そつちの物置の窓から、よく足をぶら下げて屋根を覗いた、石菖鉢せきしょうぼちの緋目高ひめだかね……」

と、唇か、瞼か。——手絡てがらにも襟にも微塵みじんもその色のない、ちらりと緋目高のような紅くれないが、夜の霜に山茶花さざんかが一片ひとひらこぼ溢れたようにその姿を掠めた。

「親代々、まだ続いて達者でいます。余りかわったかわったと云うんなら、あれを一つ御馳走してあげましょうか。娘の時、私の額の疵きずを、緋目高だと云ったお礼を兼ねてね。」

「串戯じょうだんじゃあない……」

そこで旅籠屋に膳立の出来ている事を言つて今夜の馳走を断つ

た。

「ではそうなさい。近々に兄さんの来なさるツて事が此地こつちの新聞に二三度続けて出ていましたからね、……五日ほど前に瀉かたの鮒ふなを取つておいたの。お汁つけの熱いのをと思つてさ。いれものが小さかつたか、今朝はもう腹を見せたから、実は晩に皆みんなで頂いてしまつたの。……私は二人前、誰かの分とも。——嫁が笑いましたよ。」

と軽く、乳のあたりをたたきながら、

「……明後日あさってが舞台ですつてね。……じゃあ打合せやなにかで、宿で大勢待つてるんでしようね。」

「大丈夫……」

と、なぜか八郎はぶつきら棒に、

「そんな事更になしだ。……宿の方は他人交ぜず……姉さん一所  
 においでなさい。この槇村先生と二人きりです。勿論、幹事の方  
 から宿も指して寄越したし、……これでも、こんな土地……違っ  
 た……」

と胡坐あぐらを整然きちんと直して、ここで十万軒が崖にごつごつをぶち開  
 けたが、「そうでござんすとも、東京からいらしたんでは。」  
 ために勢いきおいくじが挫けたそううで、また胡坐で、

「これでも人寄せの看板になるんですから、出迎でむかいやなんか、そ  
 の支度したくもあつたんだらうが、……そのくらいなら、先生を誘つち  
 やあ来ないんですよ。宿だつて知らせやしません。——生意氣を  
 言うようだけれど、何のかのつて、煩うるさいから。……明後日あさつて——時

間前にさえ楽屋へ行けば可いんです。——若干金か、旅費を出して、東京から私を呼ぶつたつて……この土地の人は、土地流の、土地能の、土地節の、土地謡の方が大した自慢でね、時々九段や、猿楽町……震災で焼けたけれど、本舞台へ来て見物したつて、ふん、雁鴨がんかもの不忍池しのばずに、何が帆を掛けてじやい、こっちは鯨の泳ぐ大潟の万石船じやい——何のツて言う口です。今度だつて、珍らしい処を見世みせものの気で呼んだんだからね。……ただ遊びじやあ旅錢ゆとり旅籠錢ひさしの余裕はなし、久ぶりひさしで姉さんの顔は見たし、いい幸さいわいに来たんだから、どうせ見世ものなら一人でも多く珍らしがらせに、真新しい処で、鏡の間まから顔を出して、緋目高で泳いでれば可いんです。」

八郎は熱い茶を立続けに煽あおつて言った。不思議おもてに面さつに颯そう爽そうたる血が動いた。

「でもね、槇村さん、大諸侯だいだいみようの持もの御秘蔵というのがある

んですから、衣裳いしやうには立派なのがあります。——第一天人の面

は、私どもの方でも有名なのだし、玉の簪かんざし、髻かづら、女飾髻おんなばしら、鬘まげ、鬘まげ、

摺すり箔はく縫は箔はく、後で着けます 長ちやうけん 絹けん なんぞも、私が小児こどものうち、

一度博物館で陳列した事がありますがね、今でも目に着いていま

す。全く三保の浦から松の枝ぐるみ霞たなびに靨なびいて来たようでした

よ。……すぐわきの築山の池に、鶴が居たつけ、なあ……姉さん。

……運動場で売っていた、ふかしたての饅頭たまが、うまそうたで堪たまら

なかつたが、買えなかつた。天人の前に、餓鬼が居りや世話はな

い。」

と云つて苦笑しつつ、ほろりとした。

橘八郎は、故郷の初の舞台において、羽衣の一曲を勤めんとするのである。

話頭が転じた。――

何の機掛きっかけもなかったのに、お悦が、ふと……

「……おひささん……」

とこう言い出したのが、私の耳を打った。

「……お久さんから便りがあったのでしよう、兄さん。」

私たちが、もう立たち構がまえをした時で。

火鉢に中腰を浮かした膝が揺れて、八郎の顔がちよつと暗く見

えた。沈んだ声で、

「……ありました、ありましたがね。」

「いいえね、……この春ごろでしたよ、ふいと店へ見えてね、兄さんの所番地はツて聞いたんですの。何でも十何年ぶりとかで、この土地へ帰って来ましたってね……永い間、北海道も、何とかツて、ずツと奥の炭坑の方に居たんですってさ。」

「僕は返事を出しません。」

と、やや白けて言う。

「そうですか。」

「で、どんな様子をして……いや、聞くまい、薄情らしくって、姉さんに恥かしい。」

「私は何とも思いはしません。」

「畑はたした下ツてどんな処です。村かしら。」

「いいえ、町ですよ、ズツとはずれの方ですけれど、……じやあ逢あいませんか。」

「さあ、どうしようかと思つて——槇村さん、聞かない振で居て下さいよ。」

「ちよつと、失礼しようかね。」

私は言つた。

「飛んでもない、いずれ先生には更あらためてお話ししますがね——そこでだ、姉さん。」

「兄さん、構わないじやありませんか、どつちだつて、逢つたつ



て……逢わなくツたつて……」

「さあ、そのどつちだつてで実は弱つた。」

額をうつむけに手をあてた。

「今度来るにも、ずつと途中から気になつていゝんですよ。――

新聞なんか見ようつて柄じやあないから、今度の事も知りやしま  
すまい。湯屋、かみゆいどこ髪結所のうわさにだつて、桜が咲いた歌舞伎の

方と違つて、能じやあ松風の音ぐらいなものですからね。それと  
も聞き知つて、いまここへ訪ねて来たつて、居ないと言へば、そ  
れまでだし、……職業が職業だから、そこへ掛けては他人数で隔  
てが出来ます。楽屋口で断ことわるのも仔細しさいないけれど、そうかつて、  
実はね、逢いたくないことはないんですよ。」

「じゃお逢いなさいな、どうしてさ。」

「ところが眷属けんぞく大人数です。第一亭主がありません。亭主から、亭主の兄弟、その甥おいだ、その姪めいだ、またその兄だ、娘だ、兄の児こだ、弟の嫁だつて、うじやうじやしている……こつちが何ものだから職業も氏素性も分らなけりや、先方様さきさまも同然なんだから、何しろ、人の女房で見りや、その亭主に御承知を願わなけりやならない……」

「それは、兄さん、仔細わけはないじやありませんか。」

「さあ、ところがね、義理にも、お目に掛かろうなぞと来た日には

——

細君が何か言うと、

「可厭、可厭、可厭なんだよ、そんな奴に、」

とだだを捏ねるような語調と態度で、

「博徒ばくちうちでも破戸漢ごろうつきでも、喧嘩あいてに相手は扱えらばないけれど、親類  
附合は大嫌いだ。」

「ああだもの。」

「いささか過激になったがね。……手紙の様子じゃあ、総領の娘  
というのが、此地ここで縁着いたそうだから、その新婦か、またその  
新郎なんのツてのが、悪く新聞でも読んでいて——（お風説うわさはか  
ねて）なぞと出て来られた日にや大変だ。」

「じゃあ、兄さんの、好きになさい。」

が、すこしも投出した様子はない。

「お久さんだけ、一人だけよ、一人だけなら逢つても可いんでしよう、どう？」

「さあ、そう、うまく行くか知らん。……内証で呼出したりなんかして、どんな三百代言が引ひっから擲からまろうも知れないからね、此地こっちは人氣が悪いんだから。」

「分りました。」

ふきこぼれる鉄瓶をトンと下ろして、

「私に任せておおきなさい。」

翌朝——今朝は細君が、八時に旅店へ訪ねて来た。豊んだ風呂敷を持ったまま、

「兄さん、お久さんは家へ来ます。時間は極めておかないけれど。……」

「早業だなあ、町はずれだというのに、もう行って来たんですか、  
早いこと、まるで女天狗だ。」

と口では言いつつ、八郎は自からその深切に頭を下げた。

「一人だけ……」

その黙って頷くのを視て、

「で、亭主は居なかつたかね。」

「居ましたとも、居たつて構やあしない。……逢いたくないものは逢いたくないんだから。」

「遣附けましたな、いや外交家だ。辣腕辣腕。」

と瘦やせた肩つっぱを突張つっぱりながら、

「他ほかには、誰も……」

「その縁着いた娘さんが帰っていますよ。トラホームで弱よつてるんですって。」

八郎はまた颯さつと眉まゆを曇くもらせた。もつとも外へ出ると、もう、小川添こみじの錦葉もみじで晴はれたが。

やがて公園の時雨となつたのであつた——

ところで……紅あかき、青あおき、また黄きなる魚ぎよ貝ばいを手に手に、海豚いりかが三さん頭びき、渋柿しぶかきをぶら提たげたような恰かっ好こうで、傘かの辻つじから紅屋べにやの店へ入いつたが、私は法然頭はつぜんがしらの老主人らうしゅじんをはじめ、店に居いる人たちの

外に、別に、「いや、昨夜は——」とその店仕きりの暖簾のれんを潜くぐる時、隅の棚の、あの福助に思わず声を掛けようとしたのには、あとで自分でも妙な気がした。なぜというに、目をきよろりと出額おでこの下から、扇子がまえ構まで、会釈をしたように思ったからである。

「やあ、雪代さんか、」

と、八郎が声を掛けた優婉ゆうえんな婦おんなが居て、菊の奥を台所口から入ったお悦の手から魚籠を受取った。……品のいい、おとなしづくりの束髪で、ほっそりした胸に紅い背負しよいあげ上あがちらりと見えて、そのほかは羽織も小袖も、ただ夜の梅に雪がすらすらと掛かつたやうな姿であつた。——あとでも思つたが、その繕つくわなない無雑作むざくな起居たちいの嫺しなやか々々さもそうだが、歩ある行く時の腰やわらの柔やわかに、こうまでな

よなよと且つすんなりするのを、上手の踊のほかは余り見掛けない。引ひきしまった、温かい、すつと長い白い脚が、そのまま霞を渡りつつ揺れるかと見える。同じくらしいの若さの時、お悦の方は颯さつと脱いで雪が露あわれたのだし、これは衣きものを透通るのであろう。

「雪代さん」聞いただけで、昨夜ゆうべから八郎も言わなければ、あえて私も聞こうとはしなかった。その「お久さん。」とかいうのではない事は直ぐに知れた。雪代はお悦の娘で——主人は折から旅行中の、ある陸軍中佐の夫人だという。

「小父さん、いらつしやい。」

八郎はずかずかと、

「よく、来たね。」



「ええ、私今日は、接待員よ、御珍客様の。」

「うむ、沢山たんとあの先生にお酌をしてあげておくれ。——これで安

心したよ。……やくぎな小父さんなんぞと違つて、先生だからね。

学校出の令夫人おくさんだ、第一義理がある。何しろ、故郷は美人系だッ

てんで、無理に誘つて来たんだけど、まだ一向別嬪べっぴんにお目に

かからないので、申訳のなかつた処なんだよ。お前さんの顔を見

て、ほんとうに安心した。——いかがです、楨村先生。」

「串じょうだん戯じゃあない、串戯ですよ。いやまつたくです。」

そこで私は雪代さんの礼を受けた。

八郎は、すぐ前の台所へ出て、流ながしに立つたお悦の背後うしろから、肩

越しに覗のぞきこ込んでいたが、

「来て御覧なさい槇村さん——この鮒は見ものですから。」

私はまだ馳走に呼ばれて台所を紹介された事がない。が、そんな心安だてより、鮒の見事だったのより、ちよつと話したいのは三傘夫人の効々かいがいしさで。……まないた俎の上に目の下およそ一尺の鮮せんり鱗、ばちばち翻るのに、襷たすきも掛けない。……羽織を着たまま左の袖口に卷込んで、矢蔵の艸そくという形で、右に出刃を構えたが、清すずしい目で凝じつと視みると、庖丁の峯を返してとんと魚頭を当てた、猿ひとうちの一打、急所があるものと見える。片手おろしに鱗うろこを両面にそいで、はじめて袖口から白い手を出して、腮えらをおさえて、ぎりりと腹を。

「雪代、雪代。」

その人も覗いて立った。

「水、水。」

「ほッ。」

と言う……姿に似ない掛声で、雪代は、ギイ、ギイ、キクン、カツタンと、古井戸に、白梅のちりかかる風情で、すんなりした、その肩も腰も靡なびかせる。

「ははあ、床下の鉄管で引いたんだね。」

もくもくもくと湧出わきだす水で、真赤まっかな血を洗いながら、

「嫁ねえさん、嫁さん。」

「はい。」

と二ふたつ 竈べつの 大鍋おおなべの下を焚たきつけていた、姉あねさんかぶりの結ゆ

綿いわたの花嫁が返事をする、と、

「その大皿と、井を——それ、嫁ねえさん、そつちの戸棚。」

この可憐なものと、窈ようちよう窕たうたる、二人を左右に従えて、血ぬつた出刃さきの尖を垂直に落して、切身の目分量をした姉御は、腕まくりさえしないのに、当時の素裸の若い女を現実した。

「榎村さん、——そこに柿の樹がありましたよ。」

八郎は流ながしの窓から指ゆびさして、

「あの一番上の枝に草鞋わらじが一足ぶら下っていたんですよ。いつか私が来た時に、五月ですね。土地とち子っこだが気がつかなくった。どうしたんだって聞くと、裏の家うちへ背戸口から入った炭屋はきの穿かえたのが、雪が解けて、引掛ひっかつたんじゃあない……乗ってるんだって

「お目に掛けたいようですわ。」

と私に、雪代が言った。

「しかし、この土地も開けたよ。何しろ、お母つかさんが、嫁よめさんを呼ぶのに、姉ねえさん姉ねえさんは難ありがた有いよ。」

店で息子の声がして、姉ねえさんかぶりをちよつとはずしながら出て行く、結綿つねの後姿を見ながら八郎が言うど、

「……お恒つね——じゃ兄あにさんのお気きに入るまいと思おもつてね、いえ、不断つたも、もうずつと奉たてまつっています。……でも、時々……お恒——とやる事。……」

庖丁を一つ当あつて、

「何てつたつけね、堅くさ、勿体らしくさ。」

雪代が微笑ほほえみながら、

「……なきにしもあらず……沢山よ、ほほほ。」

#### 四

「さあさあ、追立おったてを食わないうちに、君子は庖廚ほうちゆうを遠ざかろう。お客様はそちらへ——ちよつとぼくは、ここの仏間というのへ御挨拶。」——

蔵前の違棚の前に、二人の唐縮緬めりんすゆうぜん友染の蒲団が設けてあつたが、私と肩を別つようにして、八郎が階子段はしごだん下の小間こまへ入つた。

大方そこで一拝に及んだのであろう。雪代の手から、私が茶を受  
け取った時であつた。

仲仕切の暖簾のれんに、人影が、そば降る雨に陰気に映すと、そこへ、  
額の抜上つた、見上皺みあげじわを深く刻んだ、頬のげつそりこけた、ば  
さばさ乾干しなびた、色の悪い婦おんなの、それでも油でかためた銀杏いちようがえ  
返しをちよきんと結んだのが尖とがつて、鬱金木綿うこんもめんの筒袖の袖口を綿  
銘仙の下から覗のぞかせた、炭を引搦ひつつかんだような手を、突出した胸  
で拝むように組んで、肩を窄すぼめながら、萌黄もえぎの綿てんの足袋で、  
畳を搜さがるように出て来た。その中仕切——本格子の板戸を隔てて  
立つた首が、ちようど棚の福助どのと合つた時、失礼だが、私は  
その女房が化けたかと思つた。

仏間の敷居へ、もつそりと膝を支くと、

「あんさん、」

と、べろりと赤爛れあかただに充血まぶたした瞼まぶたで、凝じっと視み上げた、その目  
がぼろりぼろりと、見る見る涙ふさに塞ふさがった。

「うむ、お久さんか。」

八郎の顔は、いま私からは見えなかったのである。

「お達者でねえ……」

「いや、一向どうも。」

掠かすれ声して、

「もう、いつか、いつかから、ほんに逢あいたい逢あいたいと思うて、  
どれだけ、何年になる事やら。」



と、言葉尻が泣声で切れて、ひよいと芻ねるはように両袖で顔を隠した。何だか滑おどけたように見えつつも、私はひしと胸を打たれる。

「さあ、お当り。」

お悦がその中へ箱火鉢をどさんと置いて、

「ずっと中へお入んなさい。——ああ、ええ、分つてます。」

どうやら半分は、私に対して八郎が心づかいをしたのを吞込んだらしい口振くちぶりだ、と思うと果はたせるかな、盆に、一銚子、で、雪代が絵姿のように、薄面影を暗い茶の間から、ほんのりと頭あわわられて、

「先生、あの、ちよつとお一口。」

「これはどうも、」

「お酌は拙へたですよ。旦那が気が利かないから、下戸げこの処へ、おまけにただもんめの妓こなんですから。」

と、お悦は直ぐまた台所へ。

お久という人は、やつとその火鉢の縁へ、鬱金うこんの袖口を引張ひっぱつて、

「……思ったより、あんさんは若いこと。」

「うむ、何、いやどうも何だ、さっぱりだ。」

「一度お逢いした時から、もう二十四年か五年になりますね。」

「そうかなあ。……何しろ、何が何だか分わけが解わからないんだからな、お互に。」

「いつも、ほんに、おたよりをしたい、したいと思つても、私は自分では手紙がかけず、震災のあつた時なんか、遠い北海道の果<sup>はて</sup>に居て、どれほどお案じした事やら、それでも、まあ、御無事でねえ。」

「わずかに命のあるばかりさ。」

「それでも、まあお互に息災で居れば、こうやって顔を見られま  
すぞね。ほんとうに逢いとうてねえ、何年も何年も毎晩夢に見ぬ  
事はないのです。その夢にかつて、はつきりした顔は分らんほど  
遠々しゆうて、……この春も、やつとお処が知れて、たよりをし  
たけれど……」

と、くいしばつたような涙になる。

「いや、御不沙汰をしたよ、」

また顔にあてた袂たもとをはずして、

「それはお忙しい事は知れているけれど。」

「大して忙しい事もないんだがね。名も顔も知らない御亭主のあ  
る細君の許もとへは、うっかり返事は出せないよ。誰も別に悪いたずら戯を

するとも思わないけれど、第一代筆だろう。きみだか何だか分り

やしない。何人なんびとに断つて、俺おれの妻と手紙の遣取やりとりをする。一応

主人たるべきものに挨拶をしろ！ 遣兼ねやしない……地方いなかうるさは煩

いからな。」

「煩いぐらいで……こんなに私が思っているものを、それに、そ  
んな、そんな内の人ではないのです。」

「そりや何より結構だ。……そうかい、いやに曲<sup>ねじ</sup>けてもいず、きみに邪<sup>じゃ</sup>慳<sup>けん</sup>でもないのだね。」

「ただ……困つてはいるけれどね、——何にしたかて、兄妹ですもの。」

私は酌をうけながら、ふと雪代の顔を見た。美しい人は領<sup>うなず</sup>くよ  
うに一重<sup>ひとえまぶた</sup>瞼<sup>まぶた</sup>を寂しく伏せた。

「何だか、縁づいた総領の娘が、病気で帰っているんだつて……」

「ええ、縁があつて、一<sup>おととし</sup>昨年十七で遣りましたがね、厄かねえ、

秋のはじめから目を煩<sup>わづ</sup>ろうて、ちよつと治らんもんですから、診<sup>み</sup>  
てもらうと、トラホームヤツて、……それでねえ。——あんさん  
煙<sup>きせる</sup>管<sup>かん</sup>を貸してたあせ……今朝から御飯も欲しゆうない、気がせい

てね、忘れて来た。」

「喫のみたまえ。……そうだ、煙草たばこを喫やるんだっけな。」

「女だてらやけれど、工場で覚えまして……十四の時から稼いぎに遣やられてねえ。」

「その時分だっけな、一度ちよつと夢のように逢あつたのは——」

「いんね、十七でいまの家へ一度縁ゆかりづいたけれど、姑しゅうとさんが余あまり

非道ひどうで、厳きんしゆうて、身からだ体に生なま疵きずが絶たえんほどでね、とても辛あつ

抱かかがならいで、また糸いと繰くりの方かたへ遁にげていた時ときでしたわ。」

「ああ、じゃあ、それからまた縊よりが戻もつた次第わだな。」

「お腹なかに嬰こども児もが居いたもんでねえ、いろいろ考かんえては見たけれど、

またお姑いじに苛いめられに……」

「で、子供たちは幾いくたり人だい。」

「えへ。」

と罅えみわ裂れたように、口くちもと許で寂しく笑って、

「十一人や。」

「産みやがったなあ！ その身体からだで……」

「仕方がないもの。」

「御亭主は幾つだ。」

「六十五や。」

「おおッそッそ恐おるッべくそ壮さだかなあ。」

「それでね、六人とられてしもうて、いま五人だけですがね、ほんにね、お産くるしの苦みと、十月とつきの悩なやみと、死んで行くものの介抱と、

お葬式の涙ばかりで暮すぞね。……ほんにね、北海道に十六年居る間でも、一人を負<sup>おん</sup>ぶして、二人の手を曳<sup>ひ</sup>いて、一人を前に歩<sup>あ</sup>行<sup>る</sup>かせて、雪や氷の川端へ何度行つた事やらね。因果と業<sup>ごう</sup>や。私みたいに不<sup>ふ</sup>幸<sup>しあわせ</sup>なものはないぞね、藁<sup>わら</sup>の上から他人の手にかかつて、それでもう八歳<sup>やッつ</sup>というのに、村の地主へ守<sup>もり</sup>児<sup>ツこ</sup>の奉公や。柿の樹の下や、廐<sup>うまや</sup>の蔭<sup>かげ</sup>で、日に何度泣いたやら。——それでもね、十ウの時、はじめて両親はあかの他人じや、赤子の時に村へ貰<sup>もら</sup>われて来た、と聞かされた時ほど、悲しかった事はなかつたぞね。実の親の家に居れば、何が何でも、この兄<sup>あに</sup>さんの……妹<sup>いもうと</sup>や。」

「恐縮だよ。」

「実のねえ、両親の顔も声も知らんのやけれど、自分で児<sup>こ</sup>を持つ



て覚えがあるぞね、たとえば、どんな辛い思おもいをしようと、食べるものは食くべいでも、どんなに嬉しいか、楽しいか。」

「恐縮だよ。」

「ほんに、他人に育てられてみんな事には、その辛あさは分らんぞね。」

「恐縮だよ。」

「それを、それを、まだ碌ろくに目もあかん藁わらの上から、……町の結構な畳の上から、百姓の土間へ転がされて……」

「少しお待ち！ 恐縮はするがね、お母つかさんは大病だった——きみのお産うをして亡なくなったんだ——が、きみを他よ所そへ遣つったお父とつさんやお祖母ばあさんのために、言い訳わッて事こともないが話わがある。私も

九つぐらいな時だ、よくは覚えていないけれど、七夜には取揚とりあげ

婆ばあが、味噌漬で茶漬を食う時分だ。まくりや、米の粉は心得た

ろうが、しらしら明あけでも夜中でも酒アルコール精アルコで牛乳を暖あつためて、嬰あかん

児ぼの口へ護謨ゴムの管で含ませようという世の中じゃあなかつた。

何しろ横に転がして使う壺びんなぞ見た事もないんだからね。……可いい

かい。それに活計くらしむきに余裕があるとすれば、またどうにもなる。

いま、きみは結構な町の畳からと言ったけれど、母親の寝ていた

奥の四畳は破障やぶれ子の穴だらけだ。しかも雪の中の十二月だ、

情なさけない事には熱くて口の渇く母親に、小さく堅めて雪を口へ入れ

ただけれど、降ふりたての雪はばさばさして齒きしに軋きしむばかりで、呼い

吸きを湿らせるほどの雫しずくにならない。氷がないんだよ。甘露とも法

雨とも、雪の雫が生命の露だつて、お母さんが、頂戴々々というもんだから、若い可愛い嫁の、しかも東京で育つたのが、暗い国へ来て、さぞ、どんなにか情なかつたらうと最惜がって、祖母さんがね、大屋根の雪は迂る、それは危いもんだから、母親の寝ていた下屋の屋根を這つて、真中は積つて高い、廂の処まで這つて出で、上の雪を搔いて、下の氷柱は毒だし、板に附着いたのは汚し、中の八分めぐらいな雪の、六方石のように氷つているのを搔いて取つて、病人に含ませるのだが、部屋の中はさすがに鉄瓶の湯気や炬燵のぬくもりで溶けるだろう。階子段を上り下りするうちに、日に幾度屋根へ出入りをしたか知れないとき。観音様に見えますと云つて、凝と優しい姑の顔を見ながら、苔の枯れる口を開

けた、お母さんのおもいも、察するが可いいよ。きみ、花を飾った駕籠かごに乗って江戸芝居を見た娘がそれだもの、何も時節だ。……冷いようだが、いや、寒いようだが、いや薄情だと言えばそれまでだが、農家で育って、子守をして、工女から北海道へ落ちたつて、それほど情なさけながつたり、怨うらめしがつたりする事はなかりうと思うう。

が、どうだい。

何しろ、そんな中だもの、うまれたての嬰あかんぼ児が育てられるものか。あの時、もしも縁のあつた田舎へ養女に遣らなかつたら、きみは多分育たなかつたらうよ、死んじまつたかも知れないんだ。」  
「それですから、それですから、私はいっそ死んだ方がと、昨日

も、今日も……」

「まあ、待ちなよ。……亭主が出来て、十一人か、児こをこしらえてい  
るじゃあないか。贅ぜいたく沢たくな事を云つて、親うらを怨うらむな、世間のろを呪のろう  
な！……とは言うが、きみの身の上は氣の毒だと思ふ。けれども  
考えて見るが可い、……きみは北海道の川端か、身投げをしよう  
とするのに、小児こどもを負おぶつたり抱おぶいたりしたろう。親子おふもろともな  
らある意味で本望だ。

おつか

母おつかさんはそうじゃあない、もう助おつかからない覚悟をして、うまれ  
たばかり、一度か二度か、乳ほっをぺた頬ぺた辺ぺたに当てたばかりの嬰あかんぼ児ぼを、  
見おつかず知らずの他人の手に渡すんだぜ。

私は、悲しい草双紙の絵を、一枚引ひきちぎったように、その時の

様子を目に刻んで知っている。

夜だ——きみの父親になった男は、表の間まにでも待っていたらう。母親になるのが——私も猿の人真似で、涙でも出ていたのか  
ランプ  
洋燈の灯が茫ぼうとなった中に、大きな長なが刀なた酸ほ漿おずのふやけたよう  
な嬰兒あかごを抱いて、（哀別わかに、さあ、一目。）という形で、括くり枕  
の上へ、こおう鉄漿おはぐろの口を開けて持出すと、もう寝返りも出来な  
いで、壁の方に片寝でいたお母さんがね、麻あの顱はちまき卷かへ掛かつた黒か  
髪みがこぼれて横顔で振向いた。——目は今……私の目にも見えな  
い。」

こことば  
言ことが途切れた。

「——鼻筋すきとおが透徹すきとおするように通つて、ほんのりと齒と唇が見えた

……それなりがっくりと髪も重そうに壁を向いた処へ、もう一度、きみの母親がのしかかつてあかんぼ嬰兒を差出すと、今度は少し仰向けあおむになつたと思うと、お母さんの白い指が、雪の降止もうとするように、ちらちらと動いた、——やけ自棄におはぐろ鉄漿の口が臭くつてそいつを振払つた、と今の私なら言うんだが、もうこの身からだで泣くのにも堪えられない、思切らせておくれ、と仕方をしたんだろう。——あとは知らない。しばらくすると、戸外おもてを草鞋わらじの音がびしやびしやと遠のいた。」

聞く方は泣なじやくつて、

「もう、怨みもどうもしませんぞね。よそで聞けば、十四五までひとつづら着られる柔かい着もの一葛籠、お金子かねもそれぞれ私につけて下

さったそうながね、私は一度かつて袖を通した事もないのです。父親はそうでもなかつたけれど、草鞋わらじの音の、その鉄漿おはぐろの口は蛇体や、鬼でしたぞね。それは邪慳じやけんな慾張よくばりや。……少しは人情らしいものあつた養父てておやの方が——やっぱりどこまでも私の不幸や——早く死んでからというものは、子守で泣かせたあげくが工場へ遣られて、それが三日おき四日おきに、五錢十錢と取りに来る……月末つきすえの工賃はね、嫁入支度に預るいうて洗いざらい持つて行つて、——さあ、否いやでも応でも今の亭主へ嫁やるといふと、それこそ、ほんに、抱えるほどな、風呂敷づつみもくれんぞね。どれほど肩身が狭かつたやら……その裸が、またお姑の氣に入らんのですね。



どこまで因果が続く事か。……また今度、あの娘の婿は、年紀としも少わかし。」

「幾歳いくつだい。」

「二十一や。」

「迅はやい奴だな、商売は。」

「蒔絵まきえの方ぞね。」

「結構じゃあないか。」

「それや処がね。まだ見習いで、十分にのうてねえ、くらしはお姑さんが、おもに取仕切つてやもんですから、あんさん、それは酷ひどいぞね——半月おきには、下駄の齒入れや、使いまわしも激しいし……それさえ内へ強請ねだりに来るがね。（母さん十日お湯へ入

りません、お湯銭たあせ、)と内証で来る。湯の具までもねえ、すれ切きれや、(母さん、……洗いがえ買うてたあせ、)とソツと来るし……」

なさけ  
「情ねえ事を云う。」

私も雪代と思わず顔を見合わせた。

「情ないどころではないのですぞ。そのあげくがトラホームや、療治は長びくし、うち中へうつるいうて、今度返されて来たですがね、病院へ遣ろうにも、それでうてさえ、内も楽どころではない処へ。」

「もん句は亭主に言えよ、亭主に。」

八郎の声はやや苛いらだ立つた。

「それを言うたかてねえ、出来るようなら可いのですけれどもねえ。」

「きみの亭主にだよ、娘の事だ。——いや婿にだよ、誰がそんな事を知るもんか。」

「そう、もぎどうに言わいでも。」

お久という人はまた袖を顔に当てた。

「私にかて、私にかて——生れてから、まだただ一日も、一日どころか一度でも、親身の優やさしい言葉ひとつ聞いた事のない私に——こんなに思いに思うて、やつと逢ったのに、」

「抱さすいたつて擦さすつたつて何にもならない——現金でなくつちやあ、きみたちは駄目なんじゃあないか。」

「あれ、あんなまたもぎどうな。」

「さあさあ、茶碗の一つぐらい引くり覆かえつたつて構わない。威勢よく、威勢よく！……さあよ。」

と結ゆいわた綿わたのに片端かっ昇あがせて、皿小鉢、大皿まで、お悦おが食卓を昇あ出した。上には知らぬ間の大鯛だいだいが尾はを刎はねて、二人の抜出しなた台所に、芬ぶんと酢すの香かの、暖あい陽かげ炎ろうのむくむく立たつて靡なびくのは、早はや鮎あの仕し込こみらしい。

「兄あさん——さあ、お久ひささん……こちらへ。……」

「それでねえ、——金かね錢せんをどうと云いうではないけれどね、亭うちのひ

主とをはじめてに、娘むすめのその婿むすめもね、そりや謡うたが好きなのですぞ。

……息こ子ごもねえ、一人は鉄てつ葉は屋やの方かたを、一人は建た具ぐ屋やの弟あ子ごにな

つているのですが、どっちも謡が大すきや。二人ともねえ、好きやぐらいか、あんさんのお弟子にもなりたいとねえ……血統ちすじは争われぬもんじゃぞね。」

お悦が膳の上をあんばい挨拶しながら、これを聞くと、眉をひそ顰めた。八郎の顔色が思い遣られる。

「婿も……やつぱり、自然と繋つながる縁やよつて、あんさんにお逢いして、謡やら、舞とかいうものやら。」

「べらぼうめ、」

猛然として八郎が、尖とがった銀杏いちようがえし返へに、膝を更かわして敷居を出た。

「そういう了りようけん簡かんだから。……ちヨツ、さあ、御馳走だ。お食

べと云つたら、鱈たらふく食うんだ、遠慮をしないで、食うものはさつさと食えよ。謡どころか、お互にすき腹がぐうぐう言つてら。」

## 五

「——伯父、甥が何だ。……姪の婿がどうしたつていうんだ。他人様の大切な娘を……妙としごろ齡十七八だつて。(お月様いくつ)のほかに、年とし紀ばかりで唄になるのはその頃の娘なんだ。謡をうたう隙ひまに挿ひまんでるが可い。私なんざ、二十二三の中年増に、お酌を頂いたばかりで……この通り。」

八郎は雪代の酌を受けて、恭うやうやしく頂いた——その癖酌を受けた

のは今ばかりではない、もういい加減酔っている。実は私も陶とうぜ然んとしていた。

「これ、土手で売る馬肉じゃあないが、蹴けころ転の女郎の切売を買ったつて、当節では大銭だろう。女房は無た銭で貰うんだ——娘に：  
 ……筆筒たんす、長持から、下駄からかさ、傘、枕のしに熨斗が附いてるんだぜ。きみの許とこは風呂敷にもしろ、よしんば中が空からだつて、結びめを蝶々にしたろう。裸はだか体かでそいつを引背負ひっしょつたつて、羽の生えた処は、天あ津風まつかぜ雲の通路かよいじじゃないか。勿体なくも、朝暗いうちから廊下敷居を俯うつむ向けけに這はわせて、拭ふき掃除そうじだ。鍋なべ釜かまの下を焚たかせる、水をくませる、味噌みそ漉こで豆腐とうふを買うのも、井いで剥む身みを買うのも皆女房の役だ。つかいはや間の隙ひまにはお取次、茶の給仕か。おやつ

の時を聞けば、もうそろそろ晩のお総菜拵ごしらえにかかつて、米を磨とぐ。……皿小鉢を洗うだけでも、いい加減な水みずぎよう行なの処へ持つて来て、亭主の肌襦袢はだじゆばんから、安達ヶ原あだちで血を舐なめた婆ばばあ々の鼻はなふ拭きの洗濯までさせられる。暗いあかりで足袋の継ぎはぎをして、靴ひびあかぎれの手を、けちで炭もよくおこさないから……息で暖める隙ひまもなしに、鬼婆の肩腰を、擦さするわ、揉もむわ、で、そのあげくが床の上あげおろ下し、坊主枕おおの蔽おおいまで取りかえて、旦那様、御寝げしなれだ。

野郎一生の運が向いて、懐はたを払はいた、芸妓げいしや、女郎おんなに惚ほれられたってそうは行かない。処ところを好き自由に抱だっこに及んで、夜の明けあけるまで名みようだい代だいなしだ。竜宮りゆうきゆうから小槌こづちを貰もらったって、振ふつても敲たた



いてもかかあ媽々はお出ねえ。本来ならずし龕に納めて、高い処に奉つて、三度三度、お供物を取換とつかえて、日に一度だけ扉を開いて拝んでいなければ、けりや罰が当ら。……

処を……ありがたい神仏の広大なお慈悲の思召しで、それには及ばず、世間のならい、好き自由にして摺すり切れるまで使つておいて、何を、禪ふんどうしも買つてやらない、里の母親の処へ、湯銭の無心下駄の齒入まで強請ねだらせるとは何事です。女房は何がたのみだ。せめて病やみわづら煩わづらいの時、優しい言ことばも掛けられて、苦い薬でも飲ましてもらおうと思えば、何だ、トラホームは伝染うつるから実家さとへ帰れ！ 馬鹿野郎、盲目めくらになつてボコボコ琴でも弾ひきやがれ。何だ、妹の娘で、姪の婿のよしみをもつて俺に謡を聞かせろ——まいを

舞え。わるく、この酒でちらツかな目の前五六尺が処へ面を出し  
て見ろ、芸は未熟でも張扇で敲き込んでるから腕は利くぞ。  
横外頬を打撲わさせるぜ。

またその鉄葉屋と建具屋の弟子だつてそうだ、血統は争われぬ、  
縁に繋つて能役者が望みだ、氣障な奴だな。役者になる隙があつ  
たら、——お久。……」

と口を曲めて横ざまに視た。

「お前のその蝦蛄の乾もののようになつた、両手の指を、交る這つて舐めろと言え。……いずれ剣劇や活動写真が好きだろう。  
能役者になる前に、なぜ、鉄鎚や鑿を持つて斬込んで、姉を苛  
めるその姑婆を打のめさないんだい。——必ず御無用だよ。」

そういうかたがたを御紹介とか、何とか、に相成るのは。」

「あんさんは酔つてですぬ。」

と涙も忘れて、胸も、空洞うつろに、ぽかんとして、首を真直まっすぐに据すえながら湯の鮎ふなの碗わんを冷さまして、箸はしをきちんと、膝ひざに手を置いた状さまは可哀あわれである。こつちには、蟹かにの甲羅こうら——あの何の禁ましな厭ないだか、軒のきに鬼おにの面おもてのごとく掛かつたのを読者は折々見られたであろうと思おもう——針はりを植うえた赫かつと赤あかいのが、烈々たる炭火すみに掛かつて、魔界まがいの甘酒あまざけのごとく、脳味噌のうみそと酒さけとぶつぶつと煮ゆえているのに。——

「お悦えつさん——姉あねさん——私の言う事は間違まちがつてるだろうか。」

「槇村先生さきむらにお聞きなさい。」

私は、……いまふと妙な形容をしたのに対して、言憎ことにくいが、甲

羅酒を掬<sup>すく</sup>つてただ笑った。

「邪慳<sup>じやけん</sup>かしら、薄情か知らん、たとえば、甲羅酒のように聞こえますか。それとも雪代さんの顔……」

「可厭<sup>いや</sup>だ、小父さん。」

「いや、天人だよ、大したものです。茨<sup>いばらがに</sup>蟹<sup>かに</sup>のようか、それと

も、舞台上で……明日着ける……羽衣の面のようか、と云うんだよ。」

「どっちでも可いから、何しろ、まあお食<sup>あが</sup>んなさいよ。」

「名言だなあ。」

八郎は肩をのめらした手で膝<sup>た</sup>を敲<sup>たた</sup>いた。

「何事もこれ食うためだ。が、どっちでも可いたって、<sup>は</sup>憚<sup>ば</sup>り<sup>か</sup>なが

ら雪代さんの顔は舐めさせもしますまい。食うとなりや、蟹の面だ。ぐつぐつぶくぶくと煮えて、ふう、ああ、旨しそうだ。」

と被さるように鼻を持って行つたと思うと、

「ニヤーゴ！」

ああ、そこへ猫が出たかと思う、私さえ吃驚した。いわんや、台所から盆を運んで、階子段の下まで来かかった結綿は、袖を刎ね、褌をはらりと乱して台所へ振向いた。

「あれえ、お勝手へ、野良猫が。」

「お返したと見える。」

雪代がちよつと襟を合わせながら、

「お母さんなのよ。——困るわね。」

「真に迫りましたよ。」

と私も言った。

「だって、兄さんが嗅ぐんだもの。」

「天人からはじまって、地獄、餓鬼、畜生だ。——浅間しさも浅間しい、が、人間何よりも餌食えじきだね。私も餌食さえふんだんなら、何も畜生が歯を剥くむように、建具屋の甥や、妹の娘の婿か、そのまきえや蒔絵屋なんか罵ののしりやしない。謡も舞も、内に転がしといて見せも聞かせもしようがね。」

坐り直つて、なぜか、八郎は懔然ぶぜんとした。

「——姉さん、ここに居る、この人が、」

八郎は片頬かたほで妹を斜ななめにさして、

「無心を云う警戒でもするようで浅間しいが、聞いて下さい。私たちは職業として、主要おもな収入高とりだかと言え、その全体と言わないまでも八九分までは謡の弟子だよ。弟子を取るんだよ。客さきさえ良けりや、盆暮の附届けだけでも——云うことは下等だがね——一年はくませよう。……はずんで、電話を呈しよう、稽古所を承ろう。家を一軒——なぞというのは、皆謡みんなの弟子なんです。

植村さんも御存じの通り、……処を、私は弟子を取りません。私は舞台上で能は演やるが、謡の師匠じゃあないと言うんです。お聞きの通り、近頃は建具屋の弟子小僧まで、伯父の内弟子になつて樂をして食おうという不了簡を起すほど、この職業も、盛さかんと云えば盛だけれど、腹のくちい連中が運動がわりに声を出すんで、能

を見ようツて気はちつともない。——また、素人にや面白くないからね。芝居や活動写真のようには行かないんです。だから御覽なさい。——明日の催しだつて同じ事さ。……手ン手が手本を控えて、節づけと目張りめつぱツこで、謡ばかり聞いている。夢中で浮かれ出すと、ウウウと頭を掉ふつて、羅宇らうの中を脂やにが通るような声を出すんだから堪たまりやしません。死ぬくるし苦みで修業をした、舞台の、その時々時々のシテなんぎ、まるで御連中の眼中にやないんだから。——そうかつて先方さきはお客だ、業わざも未熟だし、決してもんくは言やしない、言わないかわりに、一人だつて紳士方の腹こなしや、貴婦人とかいう媽々かかあでんか天あめ下したの反そつ返かえりだの、華族の後家の退屈しの凌しのぎなんか弟子には取らない。また取れようもないわけなんだ。



能役者が謡の弟子を取るのは、歌舞伎俳優やくしや優せりふが台辞こわいろの仮こわいろ声を教えると同じだからね。舞台へ立つては、早い話が、出来ないまでも、神と現あらわじ仏あつちと顛やしやれ、夜叉やしや、鬼神ともなれば、名将、勇士、天人の舞も姿も見しようとする。……遊女しらびようし、白拍子しらびようしはまだしも、おそれおお畏おそれおお多おそれおおいが歌の住吉明神のお声だつて写すんです。謡うたいほん本ほんと首くびツツ引きで、朱筆で点を打つたつて、真似方も出来るもんか。

第一いっつもん、五いっつもん紋もんの羽織で、お袴はかまで、革鞆かばんをぶら下げて出稽古でげいこに歩ある行あるくなんぞ、いい凶あつちじやあないよ。いつかもね。」

八郎べいは呷あおと煽あおつて、

「省線電車——まあ、その電車に乗つたと思つておくれ。真夏の事ことでね……五十面づらをてらてら磨づらいて、薄い毛を白髪染さ、油と香

水で真中まんなかからきちんと分けて、——汗ばむから帽子を被りませ  
 ん——化粧でもしたらしい、白赤く脂あぶらぎった大面の頤おとがいを突出し  
 て、仰向けあおむに薄目を開けた、広い額がてらてらして、べつとりと、  
 眉毛に墨を入れたのが、よく見える。紗しやの横縞よこじまの袴はかまを突張つっぱらか  
 して、折革靴おりかばんを傍わきに、きちんと咽喉のどもとをしめた浅葱あさぎの紹ろの襟  
 を扇あおで煽あおぐと、しやりしやりと鳴る薄羽織あおの五紋あおが立派あおさね。——  
 —この紋が御見識だ。何と見えます——俳優あおともつかず、遊芸あおの  
 師匠あおともつかず、早い話が、山姥やまんばの男おとこ妾めかけの神ぬしの化けた  
 のだ。……間あおが離れて向う斜あおめに、しかも反そっていたのを、ちよ  
 うど私の傍そばに居あお合わせた、これはまた土用中あお、酷暑あおの砌みぎりを御勉強あお  
 な、かたぎ装づくりの本場あおらしい芸妓げいしやを連れた、目立たない洋服あおの男

が居て、件の色親仁を視ながら、芸妓と囁いて、何だろろう？——  
 —（分つた、能役者だ。）と——言つた。私は慄然として膚  
 粟あわを生じた。正にそれに相違ないのだから。……流儀は違うが、  
 額も、鼻も、光る先生、一廉いっかどのお役者で、評判の後家——いや、  
 未亡人——いや、後室たらしさ。

——あとで知つたが、その言当てた男は、何とか云う、小説家  
 だつたつて——餅屋は餅屋だと思つたよ。——

そんな脂切つたのがあるかと思うと、病上りの蒼あおつしよびれ  
 が、頬ほっぺた辺を凹くぼまして、インバネスの下から信玄袋をぶら下げて、  
 ごほごほ咳せきをしながら、日南ひなたを摺すり足あしで歩行あるいて行く。弟子廻り  
 さ。（どうなすつた先生。）——（あいかわらず腎臓が不可いけませ

んでな。）なんぞはまた情ない。が、決して悪く言うんじやない。絞ふとつて肥ふとつたのも、吸すわれて瘦やせたのも、皆これ、お互に食うためさ。今日こんにちの餌食えじきゆえです。汝おのれ一人いちにんならどうか中ちくらいにでも食えようが、詮せんずる処、妻子けんぞく眷族、つづいては一類一門のつながりに、稼かせがないではいられないからだよ。

やっと夫婦で、餌えを拾うだけで、済すんでるから、どうにか能役者の真似も出来る。……この上こ兎こでも出来て御覽、すぐその日から革靴かばんを提たげた謡うたの師匠だ。勿論謡の師匠なら謡の師匠専門は結構だ。

が、そうなりや覚悟をする。……夫として、親として、女房子を食わせるのは義務だからね。私は成るべくは謡の師匠にはなり

たかない。ただしそれでも餌えさの足りない時は、まず女房の前へ手をついて謝まるんだ。他様よそさまの大切なお娘ごの玉のごときお身体からだを自由にいたし申訳はありません。おはぐくみ申す腕がございませんから、重々お詫わびの上、お身体からだだけ、お返し申上げます。女にすたりはない。いず方へなりとも御自由にお使い下さいましとね。誰がそんな中で五人七人小児こどもを産ませる、べらぼうがあるもんか。女の方は産まないたってそうは行かねえ。身み鼻び肩かたをするんじやあないけれど、第一腕力に掛けたって女は弱い、従わせられるみんな、皆亭主の不心得だ。

悪くそんな奴が蔓はびこると、たちまち、能職が謡屋かねを兼かねるような事がしゅつたい出しゅつ来たいする。私がこのままで我を通せば、餓鬼、畜生と言わ

れても、明日の舞台は天人だ。有象無象うぞむぞうが現われて、そいつにかかずらうようになるよ、見た目は天人でも芸は餓鬼だよ。餓鬼も畜生も芸なら好い、が、奈落へ落ちさがるのが可おそろし恐いんだ。

私は能役者で、今度だつて此地こちちへ来たのさ。謡の師匠なら、さき様の歓迎会や披露どころか。私の方から、顔出しもすりや、挨拶にも廻つて、魚市で、お悦さんに鮒ふとこを強請ねだる隙ひまに、祝儀づつみの十や十五は懐ふとこ中へ入れて帰つて、トラホームの療治代ぐらい、即座に弁ずるんだが、どうだい。」

八郎は胸をしめて妹を見た。

「きみ、分つてくれたかい。」

お久という人は、きよとんとしていた。

「あんさんは、ようものを饒舌しやべつてや。」

(向むこうの山に猿が三匹)の小猿にされて、八郎はほかんとした。

身勝手な事を……しかも酔っていて饒舌しやべつたのである。実は友だちの私にもよくは分らない。が、その人となりと、境遇との婦人には、私の分らないほども分らなかつたらうと察する。

「どうだい、綺麗な奥さん——いかがです、姉さん、お悦さん。」

遠慮なく、箸はしをとつていて、二人とも揃そろつて箸を置いたが、お悦さんの方は一口飲み込むと、酒は一滴も喫いけない婦おんなの、白く澄ました顔かおつき色で、

「ニヤーゴ！」

「こいつは不可いけない。」

「お、小父さんお客様。」  
 お母<sup>つか</sup>さんに肖<sup>に</sup>てこれも敏捷<sup>すばや</sup>い！……折<sup>すか</sup>から、店口の菊花の周<sup>まわり</sup>囲<sup>い</sup>へ七八人、人立ちのしたのをちらりと透<sup>すか</sup>すとともに、雪代が迅<sup>はや</sup>くも見てとつた。

## 六

——先生、先生、橘先生——これはまたどうした事で。……既に電報で再度までも申出ましたものを、御<sup>おちやく</sup>着<sup>やく</sup>の時間どころか、東京御出発の御通知も下さらず、幹事一同は大狼<sup>おおろうばい</sup>狽<sup>ばい</sup>。勿論、催能は明日に迫りましたものを、御到着にならぬという事は断じて



ないと信じてはおりますものの、各々気が気ではありませぬ。御歓迎なり、有志の御紹介なり、昨日も三つばかり、そのための会合がお流れと申す始末——

これから、誰彼口々の口上は、読者諸君の想像にまかせた方が可い。

——当方で御指定いたした旅館へはおいでなくとも、先生が御宿泊なさりそうな四五軒、しかるべき旅館も探したが、お見えにならない。最早今夜に迫っては、いずれにせよ、是が非、御着に相違ないと、町中の旅籠屋という旅籠屋の目ぼしいのを、御覧の通りこの人数で——

提ちようちん灯いっはりが五張、それも弓張ゆみはり、馬乗うまのりの定紋つきであつた。

オーバアの紳士、道行を着た年配者、羽織袴のは、外套を脱いで小脇に挟んでいる。菊花の土間へ以上七人、軒、溝どぶいし石へ立流れて、なお四人ばかり。

——で、なお念のために停車場へも多人数が出ているようなわけで、やっと思いも寄らない旅店で、お名前を見つけました。それも今しがたの事で。しかも、しかるに御在宿でない。しかるにしかる処、何が何とあろうとも明みようとち日の演能に、今夜までおいでのない法は断じてない、ただ捜せ、捜すと極きめて、当地第一の料亭、某楼に、橘八郎先生歓迎の席を設けて、縉紳しんしん貴夫人、あまた、かつは主だつたる有志はじめ、ワキツレはやしかた囃子方まで打揃い、最早着席まかりあ罷あ在る次第——開会は五時と申すに、既に八時

過ぎました。幹事連の焦心苦慮ひとえ偏に御賢察願いたい。辛うじて御

当家、お内儀、御新造と連立つて、公園から、もみじ見物——

という、そのお悦さんは、世話狂言の町家まちやの女房という風で、暖簾のれんを隔てに、細い格子に立つて覗のぞいている。

八郎は、かまち框の冷い板敷に、ひたりと膝をついたが、そのいわゆる……餅屋は餅屋か、どこに用意をしていた知らん、扇子を帯にさしながら出迎えたのを、きちんと前に置いて、酒の勢いきおいで脱いでいたから、着流しのそげ腰で、見すぼらしく、土間に乗出すばかり手をつけて、お辞儀をしている。

提灯は吹さらす風とともに、しきりに菊の霜に動いた。

——手繰たぐりしめて駆附け、顔を見てまず安心、——が、その安心

をさせないで、八郎は——さような晴がましき席へは出つけませぬ、かくの通り食べ酔いまして、この上御酒宴の席へ連りましては、明日の勤のほどが——と誰も頼まない、酔ったのを枷にして、不参、欠席のことわりを言うのである。

思つても知れよう、これをそのままで引取る法があるものか。

推し返す、遣返す——突込む、突放す。引立てる、引手繰る。

始末がつかない。

私でさえ、その始末のつかぬのが道理だと思つた。

中に髯のある立派な紳士が、一公職の名のりを上げた。

「この中には、藩侯御一門の御老体も見えておられる。私も、武士の血を引いておりますぞ。さ、おいで下さい。」

と云つた時は、

「能役者は素町人です、が失礼します。」

と云つた、八郎はぶるぶるした。

みんな皆黙つた。しん寂然とした。

店に居た、息子も若い衆も居直つたのである。

「酔覚めだよ。」

とお悦たけが小さな声で、

「雪代、雪代。」

すつと寄ると、

「あ、内の事はお嫁さんにさせないと気まづいね……姉さん、」

嫁御は、もう台所から半身出ていた。

「広袖どてらを出しておくれ、……二階だよ。」

「まあ、小父さん、お寒そうね。」

と雪代が店へ出ると、紺地に薄お納戸の柳立やなだて枠の羽織を、ト、白い手で、踞うづくまつた八郎の瘦やせた背中へ、ぞろりと掛けた。帯腰のしなやかさ、着流しはなおなよなよして、目許めもとがほんのりと睫毛まつげ濃く、蒼つぼめる紅梅の唇が、艶つや々つやと、静しずな鬢かの蔭びんにちらりと咲く。

「似合いましたなあ、ははあ、先生。」

「それでは御出席になれますまい。」

「いや、諸君は、何を言う。」

武士の血統は気色ばんで一足出た。

「お聞きなさい——橘さん……いやしくも東京から家元同格の貴あ

下がおいでだと云うで、今夕、申合打合せのために出向いた、地謡、囃子方一同は、念のため、酒席といえども、袴を用

意しておるですぞ、何事ですか、この状は。」

八郎は紅の八口を引緊めた。梅が薰つて柳が靡く。

「最早、こうなれば八郎討死です。」

「何。」

「そのかわり、明日は羽衣を着て化けて出ます。」

「何だ！」

「ああ、その菊の下は井戸ですよ。」

お悦の高声に、一同は、アツと退いた。

が、たちまち一団になって詰掛ける。

私は思わず、お悦の肩を乗越した。

ここに不思議だったのは、そのお悦の袖の下にあつた、円い、白い、法然頭である。この老人は、黒光りのする古茶棚と長火鉢の隅をとつて、そこへ、一人で膳を構えて、こつねんと前刻さきにから一人で、一口ずつ飲んで、飲んでは仮睡いねむりをするらしかったが、ごツつり布子ぬのこで、この時である。のこのこと店へ出て、八郎と並んで坐ると、片手を膝について、片手、掌てのひらなめを斜に、その手造りの菊をこう煽あおぐように、

「貴客方あんたがた、ちよこツとその花を見て下さらんけ。……賞ほめて下さると、何じや、白いのを賞めて下されば、取次ぎの白粉おしろいじや、いろのを賞めて下されば、内の紅べにじや。一包ずつ、お景物をさし



あげる事にいたしますぞ。」

ほたりと笑つて、

「どやろか。」

と云つた。

提灯の灯も黄に白に、菊見の客が帰つたあとで、皆が揃つて座敷へ入つた時、お久という人は、自分の椀小皿をきれいに食べて、箸を置いて、そうしてうしろ向きで膳の上を拜んでいた。

「御覧なさい……あの通りだ。——嘘も大袈裟も、おおげさもの好きにも

しろ、お囃子方は宴会の席へ袴かみしもを持って出たかも知れないが、い

ま来た十人が十人、残らず申合わせたように四角な風呂敷づつみと折革鞆まがわを持っていたでしょう。あの中みんなが皆謡本おそろしさ、可おそろし恐い。：

…その他一同、十重とえはたえ二十重とえに取囲んで、ここを一つ、と節を突ついて、浮かれて謡出すのさえあるんです。

その癖、明日になって、舞台で見たが可い。誰も、富士も三保の松も視ながめちやあいない。気まぐれに、舞を見るものも、ごま点と首ツびきだから、天人の顔は黒痘痕くろあばたさ。―  
八郎は恥はずるがごとく、雪代の羽織を引被ひきかぶった。

しかり。――十五の年渠かれを養子にした、当流の元老にして大家だった養父も正に同じ事を歎なげいたそうである。上京の当時、八郎は舞台近所あるの或外国語学家の玄関に書生をしていた。祖父おおじ、伯叔おじ父おじ、一統いずれも故人だが、揃そろって能楽師だった母方のその血を

うけて、能が好きだから、間を見ては舞台を覗く。馴染になつて、元老の娘が、五つばかり年紀上だが優しい婦で、可愛い小僧だから、つい親んで、一日、能会の日、中食の弁当を御馳走して、お茶を入れて二人で食べていた。——処へ、装束を袴に直して、扇子を片手に、渋い顔をして入つて来た、六十七の老人である。「うまく遣つてるな、坊主、能はどうだ。」と言つた。大切な蒲鉾まぼこを頬張りながら、「何だか知らないが、小父さんは化けるね。」「何。」「だって、舞台じゃあ、その色の黒い皺しわくちやな手首の処が綺麗で真白まっしろだったよ。」天女の扇を持った手である。元老は当日羽衣を勤めた。「そして、（富士の高嶺たかね幽すかになり、天あまつ御空みそらの霞にまぎれ、）という処じゃ、小父さんの身体からだが、橋が

かりの松の上へすつと上つたよ。」「生意気な事を言やがる。」  
 お婆さんの御新姐ごしんぞが持つて来た冷酒ひやざけを、硝子盃コップで、かわりをし  
 て、三杯ぐつと飲んだが、しばらく差俯さしうつむ向いて、ニコリとなつ  
 て、胡坐あぐらを直して、トンと袴をたたくと、思出したように、衝つと  
 住居すまいから楽屋へ帰つた。

おなじような事がまたあつた。盲目めくらの景清かげきよである。「坊主今  
 日も化けたか。」「化けた……何だか知らない、荒磯あらいその小屋に  
 小父さんが一人居て、——（目こそ聞くらけれど）……どうかして

——（寄する波も聞ゆるは）……と言うと、舞台中ぎあと音がし  
 てね、庵いおりへ波がしらが立つのが見えた……魔法を使ったようだよ  
 。」お婆さんの御新姐の手から冷酒を三杯立たてつづけて、袴に両手

をついて、熟とうつむいた。が、渋苦い顔して、ほろほろと涙ぐんだ。「こいつを聞きたいばかりに、俺は五十年苦しんだ。媼さん、驕れ、うんと馳走してくれ。皆一所に飲もう。」後日、内弟子に極める時元老が聞いた——「坊主、修業をして、舞台へ浪が出せるかな。」八郎が立処に、「いけなけりや、バケツに水を汲んで置いて打撒くよ。」

——「尋常に手桶とも言わないで、バケツはどうだ。しかし水を打ちまくかわりに、舞台へ雑巾を掛けます。」と、月を経て、嬉しそうに元老が吹聴した。娘の婿に極った時である。

かくて、八郎は橘の家を継いで、家名を恥かしめはしないのである。

人は呼んで、宗家いえもと同格と渠かれを称たえる。

「分らないな。——まだ世界に一人のあんさんだの、たった一人の妹を言っている！ 一人の妹は分ったから、一人の妹になって来い。そのもじやもじやと生えた身うちの手足を残らずたたき切つてよ。真まばかりなら、蝦蛄しゃこだつて大好きなんだ。六十五歳で十一人うませた親仁おやしだの、その子供だの、またその婿むこだのを、私が親しいと思えるか、懐しいと思えるか、考えてみるが可いい。——何、妹に免じて、逢うだけだつて、煩うるさいな！……そんなことに免じなけりやならないような何だ？ 妹だ。……きようだいは一つ身からだだと？ 御免ごうむを蒙かぶる。血肉も骨も筋も一つに溶け合うのは恋

しい可愛い人ばかりだ。何？——きょうだいは五本の指、嘘を吐け。——私には六本指、駢指だよ。」

地方は電力が弱くつても、明るい電燈の下へ持出される言葉ではあるまい。が、燈明ばかり陰々とした、その仏間で、八郎の声が聞こえた。

——座敷では人顔の朦朧もうろうとするまで、蟹の脳味噌にえかの再び煮返える中を、いつの間にか、お久という人は、帰りしなに……

「ちよつと」……で八郎を呼出して、連込んだものらしい。——

「な、六本指はあやまるよ、分つたか。」

言い棄てて、酔過ぎたか、覚際さめぎわか、蒼白あおしろい顔をして、つか

つかと出て来たが、御飯に添えて小皿の小肴こざかなを、（このあたり

の習慣である。)手に載せて箸をつけていた、雪代夫人を視ると、  
どしんと坐つて、

「何を食べてる。」

「籩ささがれ鰈よ。」

「ああ、」

と覗のぞいて、

「東京の柳鰈か——すらりと細い……食つてるものも華奢きゃしゃだなあ。少しおくれ、むしつてだよ。」

「可いや厭な、先生。」

「何が先生だい、さあ、つて。」

小指の反った白魚の目は、紅い指環ゆびわにうつして、消えそうな身



を三口ばかり、齒に触りそうにもないのを、あんぐとうけて、むしやむしやと嚙かんだと思うと——どたりとそのすんなりした背に崩込んで、空色地に雪間の花を染模様ほっその帯のお太鼓と、梅が香も床しい細りした襟脚の中へ、やたらに顔を押し込んで、ぐたりとなつた。

「襟脚の処が三寸ばかり、お前さんに似て美しい。」

と耳みみもと許さに囁ささいたと思えば、背中へ倒れ込んで——その時、八郎は泣いたのだそうである。

私は小さな料亭の小座敷で、翌あくるよ夜、雪代夫人から、対坐で聞いた。

チーン。

すすり泣く声があると、鈴りんが鳴った。……お久という人の、め  
 んてんの足袋で帰るのを、立合わせた台所から、お悦が送り出す  
 と、尖とがった銀杏いちようがえし返を、そそげさして、肩掛もなしに、冷えりい頸  
 をうつむけて、雨上りの夜道を——凍るか……かたかたかたかた  
 と帰って行く。……

## 七

土地に大川通どおりがある。流ながれに添ったのではない。優しい柔かな流  
 に面し、大橋を正面に、峰、山を右に望んで、橋添くわには遊廓くるわがあ

り、水には蠣船かきぶねもながめだけに纏もやつてあつて、しかも国道の要路だという、通は賑とおりにぎわつている。

この土地へ来て、第三日目——八郎が舞台に立った——その夜九時半頃、……結ゆいたての円鬘まるまげに薄化粧して、質実じみだが黒の江戸えど褌づまの、それしやにはまた見られない、こうとうな町家の内儀風の、しやんと調つたお悦と、急せき心に肩を揃えて、私は、——瀬戸物屋で——骨董こっとうをも合わせて陳列した、山近き町並の冬の夜空にも、沈んだ燦爛かがやきのある窓飾の前へ立った。

「……ござんせんね。」

「ありません。」

覗のぞくまでの事はない。中でも目に立った、落着いて花やかな彩いろ

ろどり  
色の花瓶はながめが一具ひとつ、まだ飾直しもしないと見えて、周圍一尺、すぽりと穴のあいたようになっていいるのだから。

気の早いお悦が、別してある一場合だったから、つかつかと店へ入つて、

「御免なさい、」

「へい、これは。」

亭主が居合わせた。

「お昼ごろ、連つれの人と頂きました花瓶かびんなんですがね、可なり大きさのあるこわれものですから、お店で、すぐ荷造りをして頂くか、それとも一旦、宿の方までお受取りしようか、……とにかく、もう一度うかがう事になっていました……」

「はあ、いえ、それでございませうがな。まあ、御新造さん、お掛  
けなすつて。旦那もどうぞ。いらつしやいましたよ、つい今しが  
た、前刻さつきの旦那かたが。」

「来ましたつて！」

と私の顔を見て、

「一人で？……もつとも一人でしようけれど、どんな風俗なまりをして  
いました。」

ほんと、馬づらが煙管きせるをはたした。

「ええ、それがな、紋着もんつきの着流しで、羽織も着ないで、足袋は  
穿はいていなさつたようですが、赤い鼻緒の草履を突掛つっかけて……  
あの廊下などを穿きますな……何だか知りませんが、綺麗な大形

の扇を帯に打込んで、せかせかおいでなきつて、（持つて行く。）と突いきなり如おつしやる。勿論、お代済でございますし、しかし、お風呂敷か何か、と云うのに、（直じきそこだ、直じきそこだ。）と、いかさま……川端の料理屋でも飲んでおいでなきつたという御様子で、直ぐ、お引ひっかか抱えになりますとな、可なり持ちおもりがするんでやすから、扇をつツかいぼう支かいぼう棒にして。……いやどうも、花瓶も見事でございますが、どつちが綺麗かと思うほど、扇もお見事でございますがな。」

と、いいいい、これも、怪訝けげんそうに、じろりじろりと視みる。……お悦がその姿で、……ここらでは今でも使う——角つのだる樽づゑんの、一升入を提げていたからである。

（——時に、ここで乃いまし聞いたのが、綺麗な扇を持った ……友だちだから特に讚して言おう 白い手とともに舞台から消えた、橘八郎の最初の消息であつた——）

私はやや狼うろた狽たえていた。

次第を話そうが、三日目のこの朝、再びお悦さんが私たちの旅宿おとすに音訪おとすれた。またどんな事情があつて昨日きのうの幹事連が押寄せないとも限らない、早く出よう。支度をするのに、直ぐ能舞台へ出勤するのが道順だから、八郎は紋着を着た。その舞まい袴ばかまを着けるのが実に早い。夜討つぎひざに早具はやぐそく足あしだから、本来は、背後うしろへ廻つて、支つぎひざ膝ひざで、ちよつと腰板を当てるのが、景情あいともないそんな

お悦……（早間に掛けては負けそうもない、四時半から髪結を起したと云う）が、うっかり見ていたから、八郎の袴羽織には初めて接したかも知れないのであった。

途中を電車で、私の見物のために、一度いま話すこの大川通で下りて、橋はしたもと袂こずえに、梢は高く向う峰のむら錦葉もみじの中に、朱の五重塔を分け、枝は長く青い浅瀬ながれの流なびに靡いた、「雪女郎」と名のある柳の大樹を見て、それから橋を渡越した。志す処は、いずれも維新の世の波に、江戸を落ちた徳川の流ながれの末の能役者だったという、八郎の母方の祖父おおじ伯父おおぢまた叔父、続いて祖母おおば伯母おおばまた叔母おおばなどの葬られた、名も寺路町てらみちまちというのの菩提寺ぼだいじであった。——

父母の墓は東京にある。——





墓所はかしよは湿つて暗い。線香の煙の、五条いっすじ、むら生おえる枯尾花に靡なびく時、またぼつりぼつりと小雨が掛かると。——当寺の老和尚が、香染こうぞめの法衣ころもをばさばさと音さして、紫の袈裟けさを畳たたんだままで、肱ひじに掛けた、その両手に、太杖ふとづえを屈こごみつきに、突張つっぱつて、馴なれて烏の鳴く樹の枝下へ立つと、寺男が、背後うしろから番傘をさしかけた。

「大僧正の見識じやの、ははは。」

と咽喉のどを掠かすめて笑つて、

「はや、足腰もよう利かんで、さし掛傘も杖の中うちじや。意気地はないの、呂律ろれつもよう廻らん、大分に嘘をついたからの、ははは。」

中山派の大行者で、若い時は、名だたる美僧であつたと聞く。谷々の寺に飭こだまする、題目の太鼓、幾個か寺か。皆この老和尚の門もんて

弟子いしだそうである。

「よう御参詣ごしんぞうじゃ——紅屋の御新姐……今ほどはまた廚裡くりへお心づけ過分ごぎるにござる。ああ、そのお袴の御仁（八郎を云う）、前にある黒い瓶かめじゃがの。それは東海道横浜にござった、葛原くずはら（八郎の母方の姓）の妹娘の骨こつを入れて、——仲仙道上田にござる姉娘がの、去年供養に見えた一具じゃが、寺で葬るのに墓ほを穿ほつた時よ。私わしが立合たうて、思うには、祖父祖母おおじおおば、親子姉妹、海山百里二百里と、ちりちりばらばらになったのが、一つ土に溶け合あうのに、瀬戸ものの欠かけが交まじつては、さぞ疼いたかろう。飯に砂利を嚙かんだようにあろう、と思うたじゃでの、棄すてるも勿体どなたなし……誰方どなたぞ参詣まの折には、手向の花を挿されても可よいと思うて、石塔の前に据

置きましたじや。さ、さ、さ、回向えこうをなされ。いずれも久しい馴染なじみじやな。」

と、ほろりとした。聞くものの袖も時雨れつつ。……

「——横浜の、ええ、叔母の娘、姉妹でね、……叔母の娘は可笑おかしいんですが、叔父は私なんぞ顔も覚えないうちに、今の墓に眠なつてるんです。妹の方は——来る時、傍そばを通りました、あの遊廓くるわで芸妓げいしやをしていて、この土地で落籍ひかされて、可あきんどの商人あきんどの女房にやうになつたんでしたつけ。何か商売上もくろみがあつて、地方しまを了しまつて、横浜へ出て失敗をしましてね。亭主も亡くなつて、自分で芸事を教えていました。茶だの、活いけ花ばなだの、それより、小

鼓を打つてね、この方が流行はやったそうです。四五年前に、神田の私の内へ訪ねて来た時、小鼓まで持参して、（八郎さん一調を。）と云うじゃありませんか。しかも許しものの註文です。（何、私と一調だ、可よかろう。さあ素裸になりたまえ、一丁組もう、）と云つたもんだから。——勿論、年増だが、別べっぴん嬪だから取組とづくんでも可りいり了り簡りかも知れませんが……従妹め、怒つたの怒らないの、それぎり出て来ない。……音信不通同様で——去年急病で亡くなりました。がその節は、私は大阪へ行っていました。

ああ、信州の姉の方ですか。——これも芸げい妓しやで方々を流転して、上田の廓くるわで、長唄か何か師匠をしている、この方は無事で、妹の骨を拾ったんです。

横浜のしんぼとけ新仏がひとだま燐火にもならず、飛んで来ている——成

程、親たちの墓へ入ったんだから、不思議はありませんが、あの、あおごけ青苔が蒸して、土の黒い、小さな先祖代々の石塔の影に、真新しい白い塔婆で、すつくりと立ってたのにはちよつとめんくら面食いました。——（八郎さん相撲……）と、今にも言いやしないか、と思つて、ぶるぶるツとしましたよ。あれと取組むのは当分恐れま  
す。」

——寺のかえり帰途に、八郎が私とお悦にかく話した。——

雪女郎の柳を、欄干から見る、その袖もかかりそうな、大川べりの料亭一柳で、ひる昼飯を済ました。

で、川通りを歩あるきながら、ふと八郎の覗のぞ込んだのが、前に  
 言った、骨董屋の飾窓だったのである。

その花はながめ瓶びんだが、私は陶器など一向で……質も焼も、彩色も分  
 らない。総地の濃い藍あゐに、桔梗ききよう、女郎花おみなえし、薄すすきは言うまでもな  
 く、一面に秋草を描いた。その葉の透間、花の影に、墨絵の影法  
 師で、ちらちら秋の虫のようなのを、熟じつと視みると、種いろいろ々々な露店  
 の黒絵具である。また妙に、食たべものばかり。土地がらで、鮓屋すしや、  
 おでんはない。飴あめの湯、かんとう焼、白玉焼、葛くずまんじゅう饅頭、粟あわの  
 餅。……鱒どじょうを串にしたのだそうだが、蒲焼かばやきなど、ひとつずつ、  
 ただその小さな看板にだけ、売名うりな呼名をかいて、ほんのりと赤で  
 灯が入っていて、その灯に、草の白露が、ほろほろと浮く。……

「姉さん、これは夏場、この川かわどおり通へ出る夜店そっくりだね。」

八郎の家は、すぐこの近所だったそうである。

「たった一度だったが、姉さんと一所に歩行あるいた——」

「ほんとうね、……夢のようだけれど、植木屋の花の中から見た所かしら、そして月夜のようにだよ。」

真中まんなかに手がついて、見ると、四角な釣瓶つるべに似て、しかも影燈

籠の意匠らしい。

「ちよつと欲ほしいなあ。」

「欲ほしいの？」

「うむ。」

「欲ほしいものはお買いなさいよ。」



「値がどうも。」

「聞いてみましようか。……私もちつと持っている。」

「串じょうだん 戯じやじゃあない。まだ給金も受取らないし、手が出せない  
と極きまりが悪いや。」

「八さんは、それだから可いや厭やさ、聞くだけ聞くのに、何構うもん  
ですかね。」

八郎はその時十歩とあしばかり遁にげるようにしたのに、お悦はずんず  
ん入った。少し手間取ったが、胸を反らして出て来た。

莞爾にっこりしている。

「どうでした。」

「幾いく干らだと思う。——お思いなすつて、楨村先生。」

「さあ。」

「分らない。」

「五百円。」

「ええ。」

「……モ、七百元もするんですが、うしろにちよつと疵きずがありません、緋目高一疋びきほど。ほほほ、ですから、ただそれだけで——百円という処を……だわね、……もつとも諸だいまよう侯道具ですつて、それをお負け申して……九十円。」

「買おう。」

言つた通り、荷造りを頼むなり、受取るなり——楽屋へは持つて行けないから——もう一度来るとして、それから三人で舞台に

むか  
向つた。

がくえん  
楽園

と云うのだそうである。

だいまよう  
諸侯

の別業

で、一器

六方石の、その光沢ひかり水晶にして、天然に簫しょうの形をしたのがある。石燈籠ほどの台に据えて見事である。そのほか筆ひちりき策などは、いずれあとから擬なぞらえたものであろうが、築山、池をかけて皆揃つてゐる。が、いまその景色を言う場合でない。

表入口を、松原越ごしの南の町並に受けて、小高く、ここに能楽堂がある。八郎は稚おさない時、よく出入をして知つていたので、その六方石を私に教えようとして、弾はじかれたように指を引いた。直ぐそれから、池の石橋を一つ、楽屋口へ行くと、映山紅つっじ、桜の根に、立しやがつたり踞がんだり、六七人むくむくと皆動いて出た。真中まんなかに、

とが尖つた銀杏返いちようがえしで胸を突出しながら、額ひたいごし越じつに熟とこちらを  
 視みたのは、昨日きのうのお久という人で、その両りよう傍わきから躍り出した  
 二人の少年が、「久の息子です、伯父さん。」「伯父さん僕です  
 。」「橘さん、久の娘の婿ですよ。」と続いて云つたのは、色の  
 白い、にやけた男で、しよたりと裾長に、汚い板草履は可いが、  
 青い友染の襦じゆばん袷の袖口をぶらりと出している——弱つた——こ  
 れが蒔まきえし絵師で。……従つて少年たちは、建具屋ブリキヤと鉄葉屋てつえつやの弟子だ  
 から印しるし半纏はんてん腹掛はらかけでもいるか、と思つと、兀はげちよろけた学  
 生服きしやうふく、徽章無なの制帽で。丸顔で色の真ま黒くろな、目のきよろりと  
 したのが、一人はベエスボオルの小手を嵌はめた手を振るし、就なかん  
 中ちゆう一人ロイド縁ふちの大目金を掛けたのが、チュウインガムを二チ

ヤニチャと嘯<sup>か</sup>みながら、「久の息子です。伯父さん。」「伯父さん僕です。」「ごほん、……はじめまして、はい、久の主人でやして。」<sup>おおぶる</sup>大古の黒の中山高帽<sup>ちゆう</sup>を脱いで、<sup>ごましお</sup>胡麻塩のちよぼりとした髻<sup>ひげ</sup>を扱<sup>しご</sup>きながら、<sup>ひふ</sup>挨拶したのは、べんべらものの被布<sup>ひふ</sup>を着て、<sup>すす</sup>煤くすぶりの総<sup>ふさ</sup>の長い中位な瓢<sup>ひょうたん</sup>箆<sup>へら</sup>を提<sup>ひ</sup>げている。「御先生様<sup>ご</sup>。」「はい、大先生様。」と割<sup>わか</sup>込んだ媽<sup>か</sup>々衆<sup>あしゆ</sup>が二人、二人とも小<sup>こ</sup>児<sup>ども</sup>を肌おんぶをした処は殊勝だが、その一人は、負<sup>おぶ</sup>つた他<sup>ほか</sup>に、両手に小児の手を引いていた。

「あんさん、縁者の人——こちらは養家さきの兄の家内たちや——見物をさしてたあせ。……ほんに、あんさんのお底<sup>か</sup>で……今日という今日は、私は肩身が広いぞね。」

特に、婦人にかけては、恐らく世の仁者だ、と称えられる私で  
 さえ、これには辟易へきえきしたのである。

ふとお悦を見ると、額の疵あとが颯さつと薄化粧を切つて、その色  
 はやや蒼あおざめた。

愕然がくぜん、茫然ぼうぜん、啞然あぜんとして立竦たちすくんだ八郎がたちまち恭うやうやしく

お辞儀をして、

「誰方どなたも御見物は木戸口から願います。」

と言つた。

「分りました。——兄さん、私にまかせてね、分りましたよ。あ  
 なたは黙っている事……可よござんすか。さあさあ誰方もいらつし  
 やい。——御案内……ッてらッしやいッ。」

と冴さえた声で手招きをしながら、もう石橋を翻ひら然と越えて、先へ立つて駆出すと、柔順すなおな事は、一同そろそろ、ばたすたと続いて行く。

八郎は吻ほっと息して、

「何とも、彼とも、ものに譬たとえようがありません。——無理解とも無面目とも。……あれで皆木戸銭の御厄介です。またあの養母というのがね、唾つばを刎はねてその饒舌しゃべる事饒舌しゃべる事。追従ついし笑しょういの大口を開くと齒茎いばが鼻の上まで開けて、鉄漿おはぐろの兀はげた乱らんぐ杭いば齒ばの間から咽喉のどが見える。怯おびえたもんですぜ。私が九ツ十ウくらいの時まで、其奴そいつが伯父伯母の姪めいの婿むこの嫁入さきの忤せがれの孫まごの分家の新屋だというのを、そろそろと引率して、しなくも可い、

別院へ信心参りに在<sup>ざいかた</sup>方から出掛けて来て、その同勢で、久の実家だと泊<sup>とま</sup>り込むんです。草鞋<sup>わらじ</sup>を脱いだばかりで、草臥<sup>くたび</sup>れて框<sup>かまち</sup>から膝<sup>いざりこ</sup>行込むのがある、他所<sup>よそ</sup>の嬰兒<sup>あかご</sup>だの、貰<sup>もら</sup>われた先方<sup>さき</sup>のきようだい小児<sup>がき</sup>が尿<sup>し</sup>を垂れ散らかすのに、……負<sup>お</sup>うと抱<sup>か</sup>くのが面倒だから、久を連れて来ない事があります。養父<sup>ちちおや</sup>の方が可愛<sup>ち</sup>がつて片時も離さないところいう言<sup>い</sup>種<sup>ぐさ</sup>でね。……父も祖母も、あれ<sup>あた</sup>に中<sup>あた</sup>られると思うから、相当に待遇するでしょう。いい事にして、同勢がのめずり込む、臭いの汚<sup>う</sup>いの、煩<sup>うるさ</sup>いのつて——近頃まで私は、煩<sup>うるさ</sup>つて寝る時という<sup>と</sup>、その夢を見たんです。」

いや、何とも申しようのない処<sup>ところ</sup>を、木戸口をまわりに、半身で、向うからお悦<sup>えき</sup>が、松<sup>まつ</sup>を小楯<sup>こだて</sup>においでおいでを合図<sup>あひづ</sup>した。



勿論、八郎を呼ぶのではない。

「おいでなさい。——御退屈でしょうが、お席が出来たようです。あの人の事だから、今の連中と一所には決してしません。」

「そんな事なぞ。……私は<sup>たのし</sup>楽しみにしている。今日の天人の手は白いでしよう。」

不意を打たれたように、この名誉の能職は、ふと黙った。外套から、やがて両手を、片手でその手首を、さもいたわりそうに取って、据えると、扇子持つ手の甲を<sup>じっ</sup>熟と重たげに<sup>み</sup>観て、<sup>うづむ</sup>俯向いて言った。

「未熟ながら、天人が雲に背伸びはしますまいが、この手首は白いどころか——六つ指に見えなければ可いと思うんです——」

と、もの寂しそうに首垂れた。うなだ

「いづれ後程。」

楽屋口の板廊下には、松の蔭に、松の蔭に、羽織、袴が、おお、  
あさがみしも麻上下も立交る。

舞台では間あいぎ狂言ようげんの高声が、見物の笑いととも板に響いた。

## 八

私は、ここに橘八郎の舞台については徒いたずらに記事を費すまい。草  
 の花に露店の絵の花はながめ瓶を写した、陶器に対すると同じ知識の程  
 度では、専門の能職に対して気の毒だと思ふ。

ただ、幸い、……いや推量のごとく、お久という人たちとは席が離れていた。もつともほとんど満員である。お悦と取つたのも、四人席を他と半ば分けて、歩あゆみ板いたに附着くっいた出入でいに近い処であつた。

橋がかりに近い、二の松の蔭あたりに、雪代の見えたのが、単ひとえに天降あまくだる天人を待つ間の人間の花かと思う。

——のうその衣きぬは此方こなたのにて候、何しに召され候ぞ——  
幕は揚あがつた。揚幕あげまくの霞いを出いづる、玉たまに綾あやなす姿とともに、天人が見はるかす、松にかかった舞台の羽衣にしきの錦にしきには、脈打つ血が通つて、おお空の富士の雪に照栄てりはえた。

八郎のその化け方も不思議だが、気をつけて見ると、成程、も

うその時からして専念に舞台を見ているものは数うるほどしかない。もつとも謡本を手にしないものも、稀まれである。

——涙の露の玉かつら、かざしの花もしおしおと——

という頃は、低声こごえであとをつけるのが、ぶつぶつぶつ、ぼうぼうと鳴いて、羽の生えたものは、蚊かも、蜂はちも、天人であるかのごとくに聞こえた。

——迦陵かりようびんが伽がの馴なれ馴なれし、声今更わづに僅わずかなる、雁かりがねの

帰り行く。天路あまじを聞きけばなつかしや、千鳥かもめ鳴なの沖きつ

波、行くか帰るか、春風の——

そのあたりからは、見物の声が章句も聞こえて、中には目金の  
上へ謡本を突上げるのがあり、身動きして膝たを敲たたくのがある。あ

あ、しかも聞け——お久という人の息子が一人、あとをつけて謡ったのを。

——シテ「いや疑うたがいは人間にあり、天に偽りなきものを——

気のせいか、チヨツと舌打をしたように思つたが、それは儼ひがみ

耳みみであつたらう、やつと静々と、羽衣きすまを着澄して、立直つたの

を視みて、昨夜紅屋の霜ひやますに跪ひざまずいて、羽織ひらを着せられた形に較べて、

ひそかに芸道の品と芸人の威を想つた……時である。お久という

人が、席でヌツと立つて、尖とがつた銀杏返で胸を突出して正面に向

合つた、途端であつた。立籠む霧えんが艶えんなる小紋を描いたような影

が、私の袖から歩あゆみ板いたへ衝つと立つて、立つと思つと、つかつか

と舞台へ上った。その、そのお悦の姿が、くつきりとやや小さく見えた時と、かさな重り合つて、羽衣の袖がおうぎ扇子とともに床に落ちて、天人のハタと折敷く、その背を、お悦が三つ四つ平手で打った：  
…と私は見たが。……

「急病だ。」

「早打肩（脳貧血）だ。」

「恋の怨みだ。」

「薄情の報だ。」

と急きゆうきよきさや遽きゆうきよきさや囁き合う声があちこちして、天井まで湧わきかえ返るはず筈を、かえつて、瞬間、寂然しんぜんとする。

もうその時、天人は、転んだ踊子が、お母つかさんに抱かれるよう

に、お悦に背を支えられて、しかし静しずかに、橋がかりを引いて行く。  
……一の松、二の松、三の松に、天人の幻が刻まれて、その影が  
板羽目に錦を映しつつ、藻抜けて消えたようなシテの手に、も一  
度肩を敲たたいて、お悦が拾って来た扇を渡したのが幕際であつた。  
幕は消して取つた。

同時に、少し横なぐれになるまで、身に振ふりを加くれて、今度は、  
友染の褌つまを蹴けて、白足袋で飛ぶように取つて返すと、お悦が、私  
の手を取るが迅はやいか、引出すのに、真暗まっくらになつて、木戸口へつ  
いて出た。その早い事、私が第一に目についたのは、青いような  
駒下駄の鼻緒で、お悦はもう自分のを、自分で抜いて取つて、私  
の下駄をポんと並べた。

それよりして松林のたらたら下りを一散に駆出した。

「御免なさい、先生。——八郎さんに逢うまでは何にも聞かずに下さいましょ。」

「?……他国ものです、方角が分りませんから、何事も貴女次第です。」

町もこの辺は場末らしい。松を透すいて、小高く能楽堂の電燈が映さすから、あのまま、潰つぶれたのでも崩れたのでもない。が、雷か、地震か、爆発の前ぜん一秒を封じた魔の殿堂の趣して、楽園の石も且つ霜柱のごとく俯おもかげに立つのを後あとに、しばらくして、賑にぎやかな通へ出た。

「少しここに隠ていれていましょう。」

落人の体ていである。その饅頭屋うどんやへ入った時は、さすがにお悦おが



「お水みづを、お水みづを。」と云った。そうして、立続けに煽あおつて、はじめて酔ったように、……ぼつと血の色が顔に上ったのである。

「何にも言わないかわり、私は飲みますよ。」

「沢山めしあがれ、……あとで、また御馳走を。」

——電話で、旅宿を——それから呼出しだったが紅屋へ掛けた。八郎は勿論帰っていない。楽屋に居る筈はなからう。居てもそこを訪ねる数ではないから。……再びお悦の導くままに。——

かくて、川通りの骨董屋へ来たのである。

果して八郎はここへ蹶あられたのであった。

微妙な靈感と云つてもいい。……ここへ見当を着けたお悦が、

まだ驚いた事には、——紅屋で振舞った昨夜の酒を、八郎が地酒だ、と冷評さましたのを口惜くやしがつて、——地酒のしかも「劍つるぎ」と銘のある芳醇ほうじゆんなのを、途中で買って、それを角樽つのだるで下げていたのであるから。

掛けたか、掛けないように、お悦は、骨董店の倚子いすに腰を摺ずらして、

「そんな服装なりで、花瓶を持って、一体どっちの方へ行つたでしようね。」

「ええ、大橋の方へ、するするとな。はあ……」  
お悦が莞爾にっこりして、

「この人通りじや身投みなげでもありませんね。」

亭主の顔を見よ。その驚いたのへ引被ひきよせて、

「湯呑ゆのみを一つ貸して下さい、お茶碗でも。」

「はあはあ。」

芬ぶんぶん々薫る処を、波々と、樽から酌ついでくれたから、私はごく

ごくと傾けた。実に美酒うまさけの鋭さは、剣である。

「お楽たのしみでございますな、貴女様もお一ついかがで。えへへへ。」

と、自棄やけに、口惜くやしそうに、もう一つ出した茶碗へ、また充いっぱ

満いに樽の口をつけた。

「お酒だけは一滴も不可いけません。——旦那めしあがれ。……御馳

走様。ほほほほ。」

## 九

橋手前、辻の角の、古ぼけたが、店並一番の老舗しにせらしい菓子屋へ入つて、売台へ立ちながら、

「ちよつと……ああ、番頭さん、お店の方もお聞きなさい。私ね、この頃人に聞いたんですがね。お店の仕来りしきたで、あの饅頭ようかんだの、羊羹だの、餅菓子だのを組合せて、婚礼や、お産の祝儀事に注文さきへお配りなさいます。」

「へい、へい。」

「あの、能の葛かつらおけ桶かのような形で、青貝まきえじらしの蒔絵まきえで、  
三二みつと

もえ 巴もえの定紋附の古い組くみじゆう重おもが沢山ありますね。私たちが豆腐や剥身むきみを買うように、なんでもなく使っていていらっしやるようだけれど、塗ぬりといい、蒔絵まきゑといい、形といい、大した美術品とやらなんですとさ。」

「へーい、成程。」

「仏蘭西フランスのパリーの何とかって貴族の邸おうちの応接室おうせつまで、ヴァイオリンですか、楽器をのせる台になっているんですって。」

「へーい、成程。」

「提灯ちようちんを一つ貸して下さいな。」

「へーい、成程。」

「その道具屋さんで借りれば可よかったのに、ついうっかりした

もんだから。」

「へへい、成程。——どちら様で。」

「別院傍の紅屋の家内ですがね、どちらだつて構わないじやありませんか。」

お悦は澄まして、その定紋つきの提灯を下げて前へ立つと、一柳亭の傍を、川へ、石段づたいに、ぐいと下りた。大橋の橋杭が昼見た山の塔の高さほどに下から仰がれる、橋袂の窪地で、柳の名、雪女郎の根の処である。

「ここが暗いんですからね。——ちよつと見たい事があるんです。」

片側川端の窓の燈は、お悦の鼈甲の中指をちらりと映して

は、まるまげ円鬻を飛越して、川水に冷いしらぬい不知火を散らす。が、かが屈んで、差出した提灯の灯で見ると、ああ、その柳の根に、叩きつけたようになつて、秋草の花はながめ瓶ががらがらと壊れていた。石に化した羽衣を、打碎いたようである。その断片のところどころ処々、おみなえし女郎花を、ききよう桔梗を、ながれさつ流が颯と、脈を打つて、蒼白い。

「御覧なさい。こんなことだろうと思つたんです。こども小児の時、あの人は、この美しい柳に魅み入いられたんですか、何ですかね、ふらふらとして、幾たびもここで死のうとしたんですから——いいえ……」

と優しい声して、

「大丈夫、かえつて身がわりになつたでしょうよ。この花瓶がで

すよ。でも、あの人の無事のお祈りのために、放生会ほうじょうえをして行きましよう。昨日は大きな鮎あじを料理りょうりしましたから。」

持てとも言わず、角樽を柳の枝に預けると、小褌こづまをぐい、と取った緊しまった足の白いこと。——姿も婀娜あだに、流ながれへ張出しの板を踏むと、大川の水に箱造りの生簀いけすがある。

「や、それを放すんですか。」

「ええ、一柳亭のですがね、する事は先へして、あとで掛け合つた方が捗はかど取りますから。」

伸上のぞつて、覗いたが、綱ゆわで結えたまま、錠を下してない。

踞しゃがんで、提灯かざりを翳かざしたと思うと、

「あ、可厭いやな。」



と云つた。

「おおき大な鰻が居ますか、居ますか、なまず鯰。」

「どお退き、お退き——」

と生簀いけすを見詰め、頭かぶりを掉ふつて、

「いいえ、私が何かしようとする、時々目の前へ出て来るんです。……かみしも袴を着た、頭の大きな、おかしないっすんぼうし侏儒ですがね。」

私は思わず後あとへ退さがつた。葉は落ちつつも、柳の茂りで、滝に巻込まれる心持こころもちがした。氣の迷まよいと思つたが、実はお悦が八郎を引ひびたい瞬間にも、舞台の端をちよこちよこ古い福助が駈かけて通つた。

「可厭でこすけだったら。何だい出額助。」

声とともに、颯さつともつれた鬢びんを払はつて、横に提灯の柄を口に啣くわえると、まくり手に二つ三つ生簀ゆすを揺ゆつて、どぶんと水に浸した。鯉はの匆はねる隙もない。魔のごとき大きな黒い橋杭が、揃揃つて、並んで、どぶんどぶん、どぶんと笈こだまを返した。

「さあ、参りましょう、お待遠様。八さんの居いどころ所は、大抵もう知れました。」……

## 十

「……居る、居る、居ますよ。」

提灯をフツと消す。……蠟燭ろうそくの香を吸くつて消える、紅い唇を、

そのままに、私の耳みみに囁ささやいた。

八郎はちろうの菩提寺ぼだいじの潜門くぐりを入いった、釣鐘堂てうしゆどうの横手よこてを、墓所はかしよへ入いる  
破木戸やぶれきどで、生垣ひらきの前まへである。

「ほら、扉ひらきも少し開あいていますわ。——先生せんせいね、あなたね、少し  
離れた処ところで、密そつと様子ようすを見ていて下さい。……後生ごせいですから。」

「お指図さしず通り。」

私もここは声こゑを密ひそめよう。

「兄あにさん、兄あにさん——」

「うーむ。」

「あんまりつい通りな返事こたへだことね、うーむなんて。」

「うむ、だって。」

「もうちつと驚かなくつちやあ。……いきなり、お能の舞台から墓所じやアありませんか。そこへ私が暗くらやみ中に出たんだもの。」

「何だか来そうな気がしていた処だからね。」

「ええ、私もここに兄さんが居そうな気がしたんですよ。兄さん、御堪忍ね。あれ、煙草たばこを喫のんでるんですね。」

「墓を手探りで、こう冷い青苔あおこけを搜したらね、燐寸マッチがあつたよ。

——今朝忘れたものらしい。それに附木まであるんだ。ああ、何より、先生はどうした、槇村さんは。」

私は約束で息を呑んだ。

「先生はね、とにかく、雪代がおともをして、おもてなしをして

います。」

嘘を吐け。——

「どこで。」

「一柳亭で。」

「また一柳かい。いや、それにしても可羨うらやましいな。魂を入かえたいくらいなもんだ。——もつとも、魂はどこへ飛んだか、当分わか解らないから、第一その在処あつかを探してかからなけりやならないけれどね。」

「だから、お墓所へ来ているじゃありませんか。」

「まあ、そんなものか。——ああ、それにしても羨うらやましい。」

「串じょうだん戯はよして、ほんとうに兄さん、堪忍してね。」

「何をさ。」

「だって、あんな処で、兄さんを打つたりなんか。」

「いや、その事なら、かえって礼をいう。……当然のこのようだ。何だか、妹の事なり、何なり、誰かに引ひっぱた撲かれそうな気がしてならなかったからね。——一体、女形の面裡めんうちからものが見えるツて事はないのに、駢指むつゆびが真向うへ立つたんだ。」

「さあ、その事です。よ。（余計な身寄は駢指のようなものだ。血も肉も一つ身体からだになって溶け合うのは、可愛い恋しい人ばかりだ。）ツて。……あら、煙草を喫んでるから、ちらちら顔が見えて、いくら私でも極きまりが悪い。」

「何、構うもんか、全くそれに違いないんだ。」

「兄さん、きつとそう。」

「確かだ。」

「そんなら、なぜ、お久さんが真向うへ立ったって、なぜ、打たれそうな気がしたりなんかするんです。——それはきつと世間体で、妹や、その親類の、有象無象に冷くっては人に済まない、と思うからでしょう。」

「世間なんかどうでも可い。人間同志だからね。しかし舞台じゃ天人になつてゐるから。」

「天人なら、餓鬼……亡者を見ても、畜生……犬を見ても、皆みんなな簪かんざしの花の一つだと思わなければならぬかも知れませんね。そんなら、なぜ、人間そのままの時、楽屋口で、お久さんの娘の婿が、

浅葱あさぎの袖口をびらつかせた時、その、たたき込んだ張はり扇おうぎとかで、人の大切な娘をただで水仕事をさせ、抱きまでして、姑しゅうとに苛いじめさせた上、トラホームが伝染うつるから実家さとへ帰した、横よこぞつぼうを撲はりくじ挫くじかないんです。私は撲挫はりくじけば可いと思つた。撲挫はりくじいて欲しかつたよ。兄さん、私はね、弱い優しいおとなしい兄さんしか知つていません。——十四で亭主を持たせられた時分だつて、ああ、兄さんがもう少し強かつたら、乱暴らんぼうだつたら、悪たれだつたら、と思わない事はなかつたんです。——

芸事で気が強くなつたんでしようね。——

昨夜ゆうべは別れてから十何年ぶりかだし、それだし、昨夜ゆうべくらい、善知識ぜんしちとも、名僧みやうそうとも、ありがたいお説教せつぎょう、神仏しんぶつのおつげと言つ



ては勿体ないかも知れません。夜叉やしや、悪魔の御託でも構わない、あんな嬉しい話を聞いた事は生れてからはじめてです。だって、余計なものは肉親も駢むつゆび指ゆびでしょう、（血と肉と一つに溶けるのは、可愛い恋しい人ばかりだ。）というんでしよう……」

「私は信じるよ。」

「信じますね、……確かですね——そうすりや、私かつて、内の亭主は駢指むつゆびです。」

私は舌を掉ふるった。

「お待ち、お待ち。——それは芸の上の話だよ。うぞう、むぞうたかに集たかられると、能役者じゃいられない、謡の師匠で、出稽古に信玄袋を持って廻らなけりやならないというんだよ。」

「舞台だけの役者だつて、私は、兄さんの羽衣とかの天人の顔を見てゐるより、青めりんすを引ひ撲ばたくか、駢指の講釈を聞く方がどんなに嬉しいか知れやしない。あすこで、あの羽衣の姿で、面で、雲から降りたそのまま、何千かの見物に、あの講釈をしたら、どんなにかいい心持だろうの——だのに、青めりんすは引ひ撲ばたかないし、じれつたくつて、自烈じれつたくつて堪たまらない処へ、また余り姿すがた容かたちが天人になつておいでだから、これなり、ふツとどこかへ行つてしまひはしないだろうかと、夢中で血迷つて、留めようとして、ハツと思うと、舞台の邪魔をした私だから、私まで、駢指だと兄さんが言いそうで、かつと口惜くやしくもなるし、癩しやくにも障つたし、したもんだから、つい打つたりなんかして。」

「いや、もつともだ。芸に達して、天人になり澄ましていれば、羽衣さえ取返せば、人間なんぞにかかりはないのだけれど、まだどうも未熟でね、雑念が交まじるから、正面を切つて伎わざの上でもきつぱりと行やり切れないんだ。第一、はじめ、私は不意にお母つかさんが出て来たかと思つたよ。お久に対する処置ぶりが間違つてでもいるために。——ちようど棧敷のあの辺で、お母さんに抱かれて能を見た事を覚えてるから。はつと思つてそれが姉さんと気がついた時は、私は、斬きられるかと思つた……すばつと出刃庖丁でさ。……舞台へ倒れた時は、鮎あゆになつたと思つたよ。鮎より金魚だ。赤地の錦で、鏡かがみ板いたの松を藻に泳ぐ。……いや、もつと小さい。緋ひ丁め斑だ魚かだ。緋ひ丁め斑だ魚か結構。——おお、肴さかなは出来た。姉さ

ん、姉さん、いいものを持っているんだね。」

「どこでも構わず、息つきに、逢った処で、飲ませようと思つてさ。」

「頂こう——茶碗がない。」

「まさか、廚裏へも、ね。」

「飛んでもない、いまは落人だ。——ああ、好いものがある。別嬪つびんの従妹いとこの骨瓶こつがめです。かりに小鼓と名づけるか。この烏からすど胴うで遣やッつけよう、不可いけないかな。」

「ああ、好きになさい。思つた事をしないでどうするもんですか、毒どくになつたつて留とどめやしない。」

「その勢いきおいで——と爛かんはどうだろう、落葉らくえつを集めて。」

「すぐに間に合いますよ。」

「さきへ、一口遣やっつけてと。……ふーッ、さて、こう度胸すわの据つた処で、一分別遣つつけよう。私のこんな了りようけん簡かんじや、舞台に立てば引ひっぱた撲ぱたかれるし、謡の出稽古はしたくなし、……実は、みっしり考えようと思つてね、この墓所へ逃込んだんだが。」

「よく、楽屋で騒ぎませんでしたね。」

「騒ぐ間がありやしない。また騒いだ処で、玄人の連中は、いずれ東京へ出れば世話になろうと思うから、そつとして置いたのさ。そこは流儀の御威光です。」

「何がまた口惜くやしくつて、あの花瓶ぶつを打欠ぶつかいたんです。」

「もう見て来たのか、迅はやいなあ、天眼通だ。……あれはね、何、

買う時から打壊ぶちこわすつもりだったんだよ。あの絵に、秋草の中に、食ものばかりの露店の並んだのを見て、ふらふらとなった。——川通りの夏の夜店へ遊びに出ては、一軒々々指を啣くわえて欲しい欲しいと餓鬼みたいさ。買えないだろう。あの粟餅あわもちのふかし立たてだの、白玉焼の餡子あんこのはみ出した処なんざ、今思出しても、唾つばが垂れる。小僧、立つな立つな見ていて腹は満くちくならない、と言われた事さえあるんだから。

その腹癒はらいせと、自分のさもしい根性を一所に敲たたき破つたのだよ、——一度姉さんと歩行あるいた時、何か買って食べさしたいと思ったが、一銭あった。……ざまあ見やがれ亡ほろびたがね、大橋のあの柳そばの傍そばに、その頃水菓子屋があつて、茹豌豆ゆでえんどうを売っていた。」

「覚えていますよ。」

「袋で持つと、プンと臭い。蒸臭むれてる、と言ったら、洗って食べと言った。癩しやくに障さわって、打ちぶまけたら、お前さん、食べたより嬉うれしいと言ったぜ。」

「ええ、覚えていますよ。」

「場所が場所だし、念いつときばらしに一いち斉しやうに打ぶちまけたんだよ。」

「その事ですよ。何なにだつて思うままにするが可いいんです。」

「難ありがた有あい、うむそこで、分かん別べつも爛らんもつきそうだが、墓かぶの前まへで、

これは火爛ひらんだ。徳利とくを灰かに突つ込こむのさえ、三や昧き爛らんといいうものを、

骨瓶こつべいの酒さけは何なにだろう、まだちつとも通とらないが、ああ、旨うまい。」

「少きつし強つく焚たくと、灰かが立たつて入いるもの。」

「おんな  
婦だなあ、お悦さんも。この場合に、灰が飛込むなんぞどうするものか。しかしお志は頂戴する、おんなは優しいな。」

扇子おうぎを開いて蓋ふたをした。紺こんじよう青せいにきらきらと金が散る、苔こけに

火影の舞扇、……極彩色の幻は、あの、花瓶よりも美しい。

内証の焚火は、骨瓶の下伏せに、左右へ這はつた、が、硫黄も燃したのであろう。青く潜くぐつて、ちらちらと婦おんなの褌つまをなぶり、赤く立たつて男の黒小袖の膝もてあそを弄もんだ。

「ふーツ、いい酒だ。これで暮すも一生だ。車力は出来ず、屑くずは買えず、——姉さん、死人しびとやき焼の人足の口はあるまいか、死骸しがいを焼く。」

「ありますよ。」



「……………」

「市営なんのつて贅ぜいたく沢なのは間に合わないけれどね、村へ行く  
と谷内谷内やちやちという処の尼寺の尼さんが懇意ですがね。その谷戸やとの  
野三昧のさんまいなら今からでも。——小屋に爺さんが一人だから。兄さ  
んが火箸つっこを突込めば私が火吹竹を吹く。……二人で吹きおこした  
つて構わない。」

と透すかし見ると、鬢びんの毛が木の葉にこぼれて、頬ほを地じずりに、瓶かめ  
の下を吹いた。が、いつかくるりと裾すそを端折はしよつた、長襦袢ながじゆばんは、  
土にこぼれて、火とともに乱れたのである。（註。二人して火を  
吹くは焼場なりという俗信あり。）

「ちつとも構かまやしない、火葬場やきばですもの。……寝酒ぐらいはいつ

でも飲ませる。」

「面白い。いや、真剣だ。——天人にはまだ修業が足りない。地獄、餓鬼、畜生、三途さんずが相当だ。早い処が、舞台で、伯はくりよう竜の手から、羽衣を返された時、博覧会の饅頭の香気においがした……地獄、餓鬼、畜生、お悦さん。」

「ええ、そうして、強くなつて、他ひとが羽衣を奪とろうとしたら、めそめそ泣かないで、引ひっばたかなくつちやあ……」

「二人は雌めす雄おすの鬼だが……可いかい。」

「大好き。」

「家うちは？」

「駢むつゆび指を切るんです。」

「世間は？」

「青めりんすを打撲ぶっぱたくんです。」

「——姉さん、尼さんは懇意かね。」

「小屋の爺さんとも。」

「行ゆこう。」

「行きましょう。」

「槇村の知らないうちに——何しろ、さしあたり行く処は、——  
どこにもない。」

「あれ。」

「え。」

「来た、来た、来た、また来た、うるさ煩い、煩いッてば、チョツ福助

。」「

おんなな  
婦が、這<sup>はい</sup>擲<sup>から</sup>まるか、白<sup>しら</sup>脛<sup>はぎ</sup>高く裾<sup>すそ</sup>を払い、立つて縋<sup>すが</sup>るか、は  
らはらと両袖<sup>りょうそで</sup>を振<sup>あ</sup>つた煽<sup>あおり</sup>に、ぼつと舞扇<sup>まきあし</sup>に火<sup>か</sup>が移<sup>うつ</sup>ると、真<sup>ま</sup>暗<sup>くら</sup>な  
裏山<sup>うらやま</sup>から、颯<sup>さつ</sup>と木<sup>こ</sup>の葉<sup>は</sup>おろしするとともに、火<sup>か</sup>を擲<sup>から</sup>めたまま、羽<sup>は</sup>  
搏<sup>ばた</sup>いて扇<sup>あし</sup>が飛<sup>と</sup>んだ。

「あれえ、火事。」

「飛<sup>と</sup>べ、獅<sup>し</sup>子<sup>し</sup>。」

と言うとともに、手鍊<sup>てだれ</sup>は見え、八郎<sup>はちろう</sup>の手<sup>て</sup>は扇子<sup>おうぎ</sup>を追<sup>お</sup>つて、六  
尺<sup>ろくせき</sup>ばかり足<sup>あし</sup>が浮<sup>う</sup>いたと思うと、宙<sup>そら</sup>で留<sup>とど</sup>めた。墓石<sup>むいし</sup>台<sup>だい</sup>に高<sup>たか</sup>く立<sup>た</sup>つて、  
端<sup>は</sup>然<sup>ぜん</sup>と胸<sup>むね</sup>を正<sup>ただ</sup>したのである。扇<sup>あし</sup>子は炎<sup>えん</sup>をからめて、真<sup>ま</sup>中<sup>なか</sup>が金<sup>こん</sup>  
色<sup>き</sup>の銀<sup>い</sup>杏<sup>じやう</sup>の葉<sup>は</sup>のよう<sup>よう</sup>に小<sup>こ</sup>さく残<sup>のこ</sup>つた。

墓所の暗夜やみ——

「お悦さん……」

「……………」

「……火の羽衣を舞おう。もう一度舞台に立って、人間界に降りた天人を、地獄、餓鬼、畜生、三途まで奈落へ墮だして、……といつて、自殺をするほどの覚悟も出来ない卑怯ひきようものだから、冥途めいどへ捷徑ちかみちの焼場人足、死人焼しびとやきになって、胆きもを鍛えよう。それからだ、その上で……」

——（愛鷹山あしたかやまや富士の高嶺たかねかすかになりて、天つ御空の霞に）——

羽衣が三保の浦に鬢たなびくか、どうかを見るんだ、しかし、お悦

さん、……」

「兄さん、口で云う事はほんとうに行らなくつては可厭ですよ。」  
 「勿論——しかしお悦さん……酒はこぼれやしまいね。」

## 十一

私というものは、——ここで恥を云うが——（崇拜をしているから、先生と言う。）紅葉先生の作新色懺悔の口絵に、墓参の婦人を、背後の墓に外套の肱をついて凭掛つて、熟と視ている人物がある。先生の肖像だという風説があつて、男振がいかにもいい。

——男振は論じない。私のこの場合がちよつとその趣に似ていた。困つた了りようけんかた簡方の男で、そこでいい心地になつて、石塔に肱をついて、塔婆の陰から覗のぞいたうちに、真暗まっくらになつたから、ハツと思うと、誰も居ない。——とろりとして夢を見たのであるうか。

寺の屋根も、この墓場も、ほとんどのもの黒白あやめを分わかたない。が、門の方の峰の森から、釣鐘堂の屋根に、霧をすべ込こつて来たような落葉しとねの褥しとねを敷いた、青い光明は、半輪の月である。

枯かれむぐら葎むぐらを手探りで、墓から迷つて出たように、なお夢心地で、くぐりもん潜門くぐりもんを——何となく気咎きとがめがして——密そつと出ると、覚えた路はただ一筋、穴の婆さんのあたりに提灯ちようちんが一つある。

——来る時、この裏の藪やぶを潜つても、同じ墓所へ行く、とお悦  
 が言った。——ははあからめて搦手から出たかと思う、その提灯がほん  
 のりと、半身の裾を映す……棲つまは彼かの人よりも若く、しつとりと、  
 霧つたに蔦つたもみじした紅くれないの、内端うちわに細さよ。

雪代であつた。夢ではない。

「ああ、先生、母から自動電話で……（大急ぎでこつちへお迎いに。）……と云うものですから——すぐ自動車が間に合いましたの。」

母——そのお悦は、しかし、電話を掛け棄てにして、八郎ともに行くべき処へ去つたのである。

一柳亭の奥座敷で、雪代がしめやかに話した。



「……ほんとうにこまった人ですの。申訳はありません。時々、魔が魅さしたようになります。でも、悪魔ばかりではないと見えましてね……今日などは、舞台上、母があの狂きちがい気を行やらな  
いと、小父さんは、壮士のような人たち大勢に打ぶたれる処だつたらしいんですよ。——橋がかりの際きわの、私の居まわりにも、羽織袴だの、洋服だの、合あ図ずをかわわしていました。気がついて、は  
つと思おもいました時ときが、母のあの騒さわぎなんです。——帰かりがけにね、大勢おほしぞろぞろと歩ありあります人ひと中に、私わたしも交まじているとはお知しりな  
さらないものですから、……（へなちよこ伯父おぢいが何なんだい、あんな節ふしのない謡うたなんか、ただ口くちを利きいてるようだ。東京とうきょうの謡うたは場ば違ちがいだな、ここつちから縁ゆかりを切きる。）と、お久ひささんの息子こゝろさんたちが言

っていたしましたよ。お久さんは、しくしく泣いていなすつたようでしたけれども。……

八郎さんの奥さんに——いいえ、先生、それは大丈夫でしょうと思います……昔から、あの、店の、紅屋の福助の人形に邪魔をされますから。

電話でも、（あの張子を、密そつとうしろ向きにするか、針で目を潰つぶして出ておくれ、今度こそは、きつと頼んだよ。母さんの頼みだよ。）と言いました。けれども、私は決してそれはしませんでした。

ですから、谷内谷内やちやち——ええ、おんなじ字を重ねますんです。

谷内谷内の野三昧のさんまいで、兄さんと死骸を焼くんでしよう。それは

ほんとうで、そうして、それだけだろうと思います。

親類うちに、お産なぞありますとね、気が向くと、京都、岡山まででも飛出して、二月三月帰らない事が度々ありました。お産の世話なんかするの、死人焼をするの、そんなに違いやしませんでしよう。」……

死人を焼くのと、産の世話と、そんなに違いはしないと言う……この母にしてこの娘である。……雪の下を流るる血は、人知らぬかがり箆に燃ゆる。たとえば白魚にひぎくら緋桜のこぼるるごとく。——  
これは蒼鬣魚かわはぎを見て、海底の砂漠の影を想ったような空くうなものではない。

聞く処に従うと、紅屋の内儀の貞操は、かかって、おでこの古

福助の煤すすの頭かぶにある。心細い道德だが、ないよりは可よかろう。八郎に取つても、お久という人の一類と交渉を持たなくてはならぬいのなら、むしろ野三昧の人足の方が増ましかかも知れない。いわんや、亡者を焼く烈々たる炎には、あの雪の膚はだが脂を煮ようものを。朱唇に煉炭を吹こうものを。——

私にしても仮にこの雪代夫人と……

「でも、小父さんは気が弱いんですね、——あの、お久さんの頸えりの下が三寸ばかり、きれいで……似ているって、」

みみたほ  
耳みみをほんのり染めつつ、

「私のここへ——倒れて泣いたんです。涙がね、先生、随分泣いて、まだ、しっとりとしていますわ。情の迫った涙ですもの、着

換えるのが惜おしいんです。」

私は危あぶなくその背せなに手を当てようとした。

翌日、朝、汽車で立つ時、雪代さんが、ひとり衣紋えもんを正して送った。

もう一人、中学の、くちやくちやの制帽と服で、鍵裂かぎやきだらけで、素足に高足駄を穿はいた勇壮な少年がある。酒の席などでは閑却されたが雪代夫人の弟である。

「……先生、学校でも、教師も生徒も知ってるんですよ、先生の来た事を。僕、お話をききたかったんだけど、この姉なんぞが邪魔にしおって……」

「邪魔にはしませんよ。」

「何いつてやんでえ！ おかめ。」

「ああ、もう出ます——先生、くれぐれも八郎さんが言つてでした。……ほかにお見せ申すものはありませんが、是非、白山を見て下さいって。」

「先生、一番近いんじやあ、布村つて駅を出て、約千五百メートルばかり行くと、はじめて真まっしろ白いただきな巔たかねが見えますから。——いえ、谷内谷内は方角が違うんです。」

私は学生に手を伸べた。

「君、握手しよう——姉さんは、よその奥さんだから。」

「まあ、可い厭やですこと……」

学生に講義する私の学問は、学校の名誉のために黙っておこう。

白山は、藍色あいいろの雲間に、雪身せつしんの竜に玉の翼を放つて翔かけた。悪く触れんとするものには、その羽毛が一枚ずつ白銀しろがねの征矢そやになつて飛ぼう。

が、その暗く雲に包まれた麓ふもとの底に、一ヶ所、野三昧の小屋があつて、二人が火を焚たいていそうでならない。

八郎はまだ帰京せぬ。

——細君は煩わづらっているのである。

昭和二（一九二七）年四月





# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成8」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十三卷」岩波書店

1942（昭和17）年6月22日第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2011年5月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 卵塔場の天女

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>